

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第35集

向畠遺跡・社宮寺遺跡

平成3年度日坂バイパス埋蔵文化財
発掘調査報告書

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第35集

向畠遺跡・社宮寺遺跡

平成3年度日坂バイパス埋蔵文化財
発掘調査報告書

1992

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

当研究所は、掛川市内において、これまでに原川遺跡・領家遺跡・梅橋北遺跡の発掘調査を手懸けてきた。各遺跡は市内西部に位置し、弥生時代から中・近世に至る複合遺跡であることが明らかになり、各時代の良好な資料を得ることができた。特に原川遺跡と梅橋北遺跡は、隣接する袋井市坂尻遺跡と共に律令期の地方官衙の一部を形成したものと推定され、注目を集めた。その成果については、順次報告がなされてきたところである。

これらの調査に続いて、今回は市内東部の八坂・日坂地域において調査を行なうことになった。日坂バイパス関連の発掘調査は、平成元年度から開始され、平成3年度までに頭地遺跡・牛岡遺跡・向畠遺跡・社宮寺遺跡の調査を実施している。各遺跡からは、縄文時代から中・近世の遺構・遺物が多数検出されている。本書は、その内、向畠遺跡と社宮寺遺跡の調査報告書である。向畠遺跡からは、縄文時代と弥生時代の集落跡が確認され、共に小規模ながら良好な資料を得ることができた。縄文時代の発掘調査例は市内でも少なく、中でも竪穴住居跡の検出例は数少ない。また弥生時代後期の集落跡は、一単位の構成を示し、当地域の集落研究の貴重な資料となろう。社宮寺遺跡は遺構・遺物こそ希少であるが、隣接する向畠遺跡・牛岡遺跡の生活領域としての一端を窺わせるものである。

この地域での発掘調査は從来実施されたことがなく、遺跡の実態はほとんど明らかにされていない。遺跡分布調査によれば、この地域には縄文時代から各時代にわたって幾つかの遺跡が営まれているが、その数は少ない。おそらく、これは遺跡分布の実態を示しているとは思われず、今回のように新たに発見される例が多いと考えられる。調査は平成5年度まで、残り9地点が予定されており、今後の調査成果が期待される。

調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省浜松国道工事事務所・掛川市教育委員会・静岡県教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼を申し上げる次第である。また調査を暖かく見守っていただいた地元の方々、寒暑にめげず発掘にあたった作業員の方々、地道な資料整理にあたった研究所の職員、多くの助言・指導をいただいた方々に、この場をかりて深くお礼申し上げたい。

1992年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は静岡県掛川市八坂に所在する向畠遺跡・社宮寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は平成元年度から平成3年度まで日坂バイパス埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部地方建設局の委託を受け、静岡県教育委員会の指導の下、掛川市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 現地調査は、所長齊藤忠の指導の下に下記の調査員が担当した。
平成元年度　篠原修二・戸塚和美（掛川市教育委員会学芸員）
平成2年度　篠原修二・内藤朝雄・鈴木正悟
平成3年度　篠原修二・鈴木正悟
4. 本書に係わる資料整理及び報告は、調査研究部次長平野吾郎の指導の下、調査研究員篠原修二が担当した。
5. 平成元年度および平成2年度に概報を提出している。各概報と本書の記述に差がある場合、本書の記述を以て報告とする。
6. 発掘調査資料は全て財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

目 次

序
例 言
目 次

第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の方法.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	2
第Ⅱ章 位置と環境.....	4
第Ⅲ章 向畠遺跡の遺構と遺物.....	9
第1節 調査の概要.....	9
第2節 繩文時代の遺構と遺物.....	9
第3節 弥生時代の遺構と遺物.....	14
第4節 その他の遺構と遺物.....	26
第Ⅳ章 社宮寺遺跡の遺構と遺物.....	27
第1節 調査の概要.....	27
第2節 遺構と遺物.....	28
第Ⅴ章 まとめ.....	30
第1節 向畠遺跡出土土器について.....	30
第2節 向畠遺跡弥生時代の集落について.....	32
第3節 まとめ.....	33

挿図・挿表目次

第1図 向畠遺跡・社宮寺遺跡グリッド配置図.....	3
第2図 周辺遺跡分布図.....	5
第3図 向畠遺跡遺構全体図.....	7・8
第4図 S B106実測図.....	10
第5図 S P115・S P120・S P123・S P130・S P140実測図.....	11
第6図 出土遺物実測図（1）.....	12
第7図 出土遺物実測図（2）.....	13
第8図 S B101・S B102実測図.....	15
第9図 出土遺物実測図（3）S B101・S B102.....	16
第10図 S B103・S B104実測図.....	17

第11図	出土遺物実測図（4） S B103・S B104	18
第12図	出土遺物実測図（5） S B104	19
第13図	S B105・S B107実測図	20
第14図	S B108実測図	21
第15図	出土遺物実測図（6） S B107・S B108・S B109	22
第16図	S B109・S B110実測図	23
第17図	S B111・S B112実測図	24
第18図	S H101実測図	25
第19図	出土遺物実測図（7） S B111	25
第20図	出土遺物実測図（8）	26
第21図	社宮寺遺跡遺構全体図	27
第22図	S F01・S F02・S H01実測図	28
第23図	出土遺物実測図（9）	29
第1表	周辺遺跡地名表	6

図版目次

- 図版1 遺跡周辺環境（空中写真）
 図版2 向畠遺跡遺構全景（空中写真）
 図版3 1. 向畠遺跡遺構全景（東から） 2. 向畠遺跡遺構全景（西から）
 図版4 1. S B106（西から） 2. S B106炉跡 3. S P115 4. S P120
 5. S P123 6. S P140礫出土状況 7. S P140完掘状況
 図版5 1. S B101（西から） 2. S B101土器出土状況 3. S B102炉跡
 4. S B102・S B103・S B112（南から）
 図版6 1. S B103（西から） 2. S B103土器出土状況 3. S B104土器出土状況
 4. S B104（西から）
 図版7 1. S B105（西から） 2. S B107（西から） 3. S B108（西から）
 図版8 1. S B109・S B110（西から） 2. S B110土器出土状況 3. S B111土器出土状況
 4. S B111床面検出状況（西から）
 図版9 1. S B111掘り方検出状況（南西から） 2. S H101（西から）
 3. S X106（風倒木跡）
 図版10 1. 社宮寺遺跡遺構全景（東から） 2. S H01（南から） 3. S F01（東から）
 4. S F02（東から）
 図版11 向畠遺跡出土繩文土器
 図版12 向畠遺跡出土石器
 図版13 向畠遺跡出土弥生土器 20. S B101 28・33. S B103 37～42. S B104
 図版14 向畠遺跡出土弥生土器 44～47. S B104 53. S B109 56～59. S B111
 図版15 向畠遺跡出土弥生土器 23・27. S B102 29～36. S B103 41・43. S B104
 50. S B108 52・54. S B109 65. 包含層

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和44年の東名高速道路開通後も一般国道1号の交通量は増加し、交通混雑は著しくなる一方であった。このため各地域でバイパス建設が実施され、掛川市内でも昭和56年に掛川バイパスが開通し、平成元年には袋井バイパスが一部供用されている。これらの建設に伴い、これまで峯山遺跡・原川遺跡・頬家遺跡等の発掘調査が行なわれてきた。

このような中で、掛川バイパスと金谷バイパスを結ぶ日坂バイパス建設工事は、昭和61年に都市計画決定がなされ、翌62年に本格的に事業化された。路線は掛川市八坂を起点に佐夜鹿までの総延長4.3kmである。この計画に伴い、掛川市教育委員会によって昭和62年11月から昭和63年2月にかけて、路線内における遺跡の分布調査が行なわれた。その結果、周知の遺跡である頭地遺跡を含め、工事着工前に現地調査を必要とする地点として13地点が取り上げられた(遺跡分布図1~13)。この分布調査の結果を受け、建設省浜松工事事務所・県教育委員会文化課・掛川市教育委員会によって協議が持たれ、(1)この13地点について現地調査を実施する(2)調査は、遺跡の範囲及び性格等を把握するための第1次調査を実施し、その結果に基づいて第2次調査(平面調査)へ移行する(3)発掘調査は(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たる(4)調査全般にわたる調整は静岡県教育委員会が、地元との調整については掛川市教育委員会及び掛川市都市計画課が当たる等の合意がされた。その後、各関係機関によって実際の調査に向けて調整・協議が行なわれ、初年度である平成元年度は、掛川市教育委員会から発掘調査担当者1名の派遣を得ることになった。

平成元年10月2日に調査委託契約が締結され、諸準備を経て11月から現地作業に着手した。平成元年度は頭地遺跡・牛岡遺跡・向畠遺跡の第1次調査と一部第2次調査を行い、平成2年度はこれら3遺跡の第2次調査と社宮寺遺跡の第1次調査、平成3年度は牛岡遺跡と社宮寺遺跡の第2次調査を実施し、平成3年度までに4遺跡の発掘調査を終了している。残り9遺跡については、平成4年度以降実施していく予定となっている。

第2節 調査の方法

調査対象区域には、10m方眼のグリッドを設定した。グリッドは牛岡遺跡内のバイパスセンターラインのポイントNo1190とNo1185を結ぶ直線を主軸とし、No1190から北東方向140m地点を社宮寺遺跡・向畠遺跡の起点とした。主軸線は、N46°-24'-20"Eである。グリッド名は路線幅方向を起点からイ・ロ・ハ・チ、延長方向を南東から1・2・3・21とし、例えばイと1が交差する区画をイ1グリッドと呼ぶことにした。

調査は、第1次調査(確認調査)と第2次調査(平面調査)の2回に分けて実施した。第1次調査はグリッドに合わせて、幅1mのトレンチをほぼ10m間隔に棋盤状に入れていた。掘削は全て手掘りを行い、土層や遺物の出土状況の観察を進めた。基本的には遺構が検出された時点で止め、遺構の調査は後の第2次調査を考慮して行なわなかった。第1次調査の後、必要な範囲に対して第2次調査を実施した。表土除去は手掘りで行い、表土中の遺物はグリッド毎に取り上げていった。遺構検出は基本的に平面で行い、不明部分についてのみトレンチを利用した。竪穴住居跡等の遺構には、検出された順に遺構毎番号を付し、便宜的に竪穴住居跡(SB)・掘立柱建物跡(SH)・土坑(SF・SP)・小穴(SP)・溝(SD)・不明遺構(SX)という記号を用いた。後述の遺構の概要の中でも、この記号を用いて記述している。

遺構平図面及び土層図は縮尺1/20を基本とし、平面図はグリッド毎に割り付けた。写真撮影は6×7判(白黒)と35mm判(白黒・カラーリバーサル)を併用し、作業工程記録用として35mm判(カラーネガ)を使用した。全景等の撮影に当たっては、ローリングタワーを3段から5段に組んで撮影する一方、ヘリコプターあるいはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影も採用した。

第3節 発掘調査の経過

日坂バイパス予定路線内の発掘調査は、平成元年度から開始した。10月から準備作業を進め、作業員の確保・プレハブの設置・グリッド杭の設置等調査区の基本設定を行い、11月から現地調査に入った。今回報告する向畠遺跡と社宮寺遺跡は、路線内の同一丘陵上に立地する別々の遺跡であり、調査は低地上に立地する頭地遺跡や牛岡遺跡と併行して実施した。

向畠遺跡の第1次調査は、平成元年度事業として平成2年1月に実施し、調査対象面積約1,100m²の内、約100m²の確認トレンチを入れた。その結果、暗褐色土あるいは黒色土を覆土とする竪穴住居跡が確認され、表土及び覆土から弥生土器・繩文土器等が出土した。從って遺跡は弥生時代を中心とする集落跡であろうと推測された。

この結果を受け、2月に表土除去作業を一部進めた。本格的な第2次調査は、平成2年度事業として平成2年5月中旬から10月初めまで、他遺跡の調査と調整を取りながら断続的に実施した。5月中に表土除去を終了し、6月から遺構検出を開始した。遺構の検出は、遺構の西側壁の残りが悪かったことや重複があったため、意外に手間取ってしまった。7月までに、暗褐色土を覆土とする竪穴住居跡や溝等の検出を終了し、8月4日には現地説明会を開催した。当日は30℃を越える猛暑にもかかわらず、多くの参加者が得られた。8月21日には、この時点までの遺構検出状況の空中写真をラジコンヘリコプターを利用して撮影した。これ待って、竪穴住居跡の炉跡の観察や掘り方の検出を進めた。その後、調査漏れがないよう再度遺構確認を行なうと共に風倒木跡と黒色土部分の調査に入った。これまでの調査から黒色土の広がりは、木の根による擾乱(一部は風倒木跡)であり、人為的な遺構ではないことが明らかであったが、土器が混入していたため発掘を行なった。9月までに完掘写真撮影及び遺構の実測を行い、10月3日までに発掘器材の撤収を終え、調査を全て完了した。第2次調査実施面積は、最終的に約1,000m²となった。

社宮寺遺跡の第1次調査は、平成2年度事業として実施した。平成2年12月に立ち木及び茶の木の伐採を行なった後、平成3年2月に確認トレンチの掘削を行なった。丘陵斜面部分も含め、第1次調査実施面積は約250m²である。その結果、丘陵頂部のチ8グリッドとヘ6グリッドに黒色土の広がりが確認さ



向畠遺跡第1次調査状況



向畠遺跡発掘状況

れた。その内、ヘ6グリッドは小さな谷に堆積したものであったが、チ8グリッドでは土坑状を呈し遺構と考えられた。表土からは剝片と近世陶器が出土した。

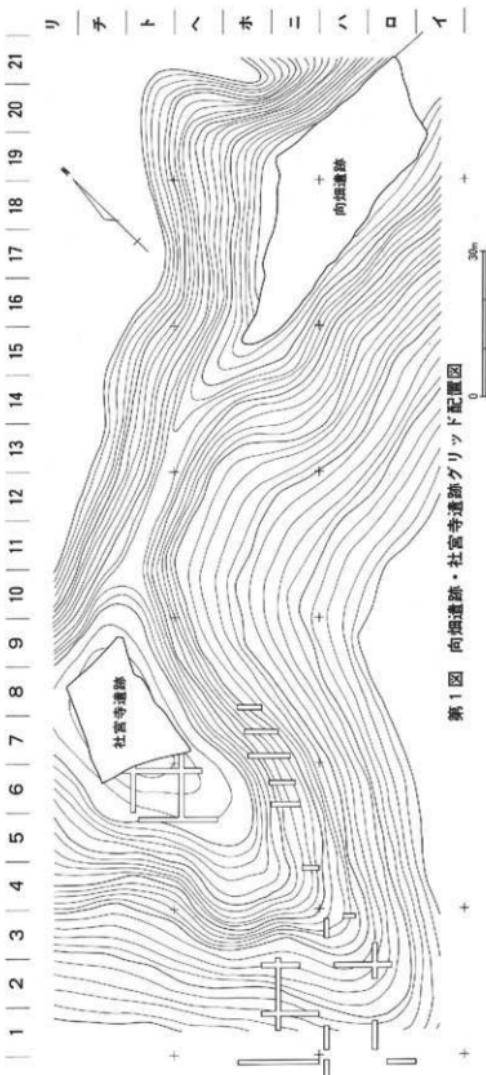
この結果を受け、第2次調査は平成3年度事業として平成3年6月から9月初めまで、他遺跡の調査と調整を取りながら断続的に実施した。4月下旬に表土除去を開始したが、西側丘陵斜面部分の土砂が用地外へ流出する危険性があったため、建設省浜松工事事務所と協議の上、この部分を除去することになった。掘削工事は5月下旬から6月中旬まで掛かり、この間調査は中断した。6月から表土除去を再開し、7月までに終了し、8月から遺構検出を開始した。遺構が希薄であったため、調査は比較的順調に進み、9月3日までに完掘写真撮影及び遺構の実測を行い、調査を全て完了した。第2次調査実施面積は、最終的に約400m²となった。



向畠遺跡現地説明会



社宮寺遺跡第1次調査状況



第1図 向畠遺跡・社宮寺遺跡グリッド配置図

第II章 位置と環境

向畠遺跡と社宮寺遺跡は、掛川市東端の逆川上流域に位置する。逆川は掛川市北東端の粟ヶ岳に源を発し、蛇行しながら南流して東山口付近で進路を西に変え、市街地を貫けて袋井市東端で原野谷川と合流する。支流の水を集めて川幅は徐々に広がり、東山口付近から比較的開けた沖積平野を形成して行く。両岸には、掛川層群と相良層群からなる標高100~200m程の山々が連なる。遺跡の所在する八坂付近でも、低位段丘と谷底平野からなる平地が見られるが、周りを丘陵によって囲まれる。現在、平地部分は水田が営まれ、丘陵地は山林を開墾して多くの茶園が造られている。周囲の丘陵は浸食が進み、掌状の尾根型地形をなし、大小の谷が入り組んでいる。

両遺跡は逆川左岸のこのような丘陵上に立地する。遺跡の立地する丘陵は南北を逆川と通称大谷沢と呼ばれる谷に挟まれ、西に向かって舌状に伸びる。そのため地滑りが頻繁に起こり、北側は崖となり南側は急斜面となる。標高は90~100m程で、低地との比高差は50m前後である。向畠遺跡はこの丘陵の東に、社宮寺遺跡は西の先端部に位置する。両遺跡は瘦せ尾根によって連なり、社宮寺遺跡眼下の低地には前述の頭地遺跡・牛岡遺跡が営まれている。向畠遺跡の調査地点は、平坦地が幅20m前後広がり、西に向かって先細りとなる。調査区北縁を稜線に、全体は南西に向かって緩やかに傾斜する。社宮寺遺跡がのる丘陵先端部は、尾根が南と西に別れ、平面的には三角形状となる。平坦部は比較的少なく、周囲は急斜面で地滑りの跡が残る。両遺跡の現況は山林と茶園であった。

遺跡周辺には、繩文時代から中・近世にかけての幾つかの遺跡が分布する。次に、逆川流域を中心とした両遺跡に関連する縄文時代と弥生時代の遺跡の分布について見て行きたい。

掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ（掛川市1984）によれば、縄文時代の遺跡は50数遺跡が確認されている（その後の調査によって若干の増加がある）。その多くは市西部を流れる原野谷川流域に集中している。早期の遺跡は少なく、萩ノ段遺跡・瀬戸山遺跡等4遺跡が知られるだけである。全体に土器の出土量が少ないこと等から極めて小規模なものと推定されている。前期の遺跡も早期と同様で、平遺跡・萩ノ段遺跡等が知られているにすぎない。中期になると遺跡数は急増し、特に中期後葉に集中する傾向がある。全体的に小規模遺跡が多い中で、原野川流域の中原遺跡や上ノ段遺跡は中核遺跡として位置付けられている。後・晩期の遺跡はやや減少傾向にあり、土器の出土量からもその規模は縮小していくと考えられている。この時期最も大きな遺跡としては、倉真川流域の里在家遺跡が上げられる。

逆川流域ではこれまでに10遺跡が知られている。上流域に集中し、ほとんどが丘陵上に立地する。各遺跡の状況を見ると、早期の遺跡ではなく、前期の遺跡としてメト遺跡、中期の遺跡として大向遺跡・狐鼻遺跡・深谷遺跡、後晩期の遺跡として木ノ下遺跡・栗下遺跡がある。しかし、各遺跡からは若干の土器や石器等が採集されているだけで、遺跡の実態はほとんど明らかとなっていない。比較的まとまつた資料が得られたのは、今回調査した向畠遺跡と牛岡遺跡が初めてのことである。牛岡遺跡からは、遺構は確認できなかったが、前期から後期の豊富な土器が出土している。特に中期後葉の中部系の土器と瀬戸内系の土器がまとめて出土しており、興味深い資料が得られている。土器は低位段丘の下層から検出されており、遺跡の立地状況としては特異である。隣接する栗下遺跡も同様な状況であり、この地域の遺跡の在り方を再検討して行く必要があろう。また向畠遺跡や深谷遺跡は、丘陵上の小規模な遺跡であり、今後このような遺跡がさらに発見されて行くと考えられる。

逆川流域の弥生時代の遺跡は、向畠遺跡を含めて46遺跡が知られている。向畠遺跡は、この中で最も上流域に位置する。中期の遺跡は少なく、7遺跡が確認されているだけである。各遺跡の立地状況を見ると、平野部に1遺跡、標高40~50m程の下位段丘に2遺跡、標高40~80m程の丘陵に4遺跡で、完全

な低地遺跡は畠中遺跡だけである。調査によって遺構が検出された遺跡は、御所原遺跡と大六山遺跡がある。共に方形周溝墓が検出されており、墓域として丘陵上に営まれた遺跡と考えられる。原野谷川流域の山下遺跡も同様で、中期の住居跡の検出例は丘陵上には今のところ見当たらない。このことから推測すると中期の集落遺跡は低地に存在する可能性は高い。市西部の低地に立地する原川遺跡では、掘立柱建物群からなる中期前葉の集落が確認されている。

後期になると、遺跡数は45となり爆発的に増加する。このような状況は他地域においても同様で、その背景には人口増加による集落の拡散があったとする見解が多い。弥生文化の発展期であり、古墳出現の前段階でもあることから必然的結果と見るべきであろう。45遺跡の内中期から継続する遺跡は、狐鼻遺跡や後沢遺跡等の6遺跡だけで、ほとんどが後期から始まる。向畠遺跡のように後期に終焉してしまう遺跡も幾つか見られるが、調査例からすると規模の大きな遺跡を中心に多くは古墳時代前期まで営まれている。集落の規模は、数軒から70軒以上と大小様々である。小規模な集落としては、大多郎遺跡や向畠遺跡等があげられる。比較的大規模な集落の調査例としては、峯山遺跡・安養寺遺跡等5遺跡がある。原新田遺跡は環濠集落で、住居跡15軒と方形周溝墓1基が検出されている。同じ丘陵にのる天王山遺跡と同一集落と考えられ、その規模は大きい。逆川中流域の峯山遺跡からは50軒、安養寺遺跡からは70軒以上、深谷遺跡からは37軒、踊原遺跡からは62軒の住居跡が検出されている。これら大規模集落は、いずれも古墳時代前期まで営まれている。立地状況を見ると、ほとんどが丘陵上に立地している。45遺跡の内、低地に立地する遺跡は郷下遺跡や池向遺跡等わずか8遺跡である。これは、逆川流域における平野部の開発が遅延していたためと思われる。但し、低地遺跡の調査はなされたことがなく、その実態は全く不明である。多くの遺跡がのる丘陵あるいは下位段丘は、低地との比高差30m前後がほとんどで、



第2図 周辺遺跡分布図

比高差50mを越す遺跡としては大六山遺跡・踊原遺跡・大蔵遺跡・大久保遺跡がある。かつてこれら丘陵上の遺跡特に後者4遺跡は、防衛的性格を持ったいわゆる「高地性集落」とする見解もなされた。しかし、この地域の後期の遺跡のほとんどが丘陵上に立地しており、全てをこのように考えるわけにはいかない。むしろ、気候あるいは地形等の自然的要因を考慮する必要があると思われる。このように考えると、低地遺跡が少ないと、丘陵上に大規模集落が形成されること、丘陵上の集落が古墳時代前期まで営まれそれ以降継続しないこと等の説明がつきやすいように思われる。

番号	遺跡名	時期	立地	番号	遺跡名	時期	立地	番号	遺跡名	時期	立地
1	川田	散布地	平野	22	吉松	〃	丘陵	43	元屋敷	〃	〃
2	頃地	奈～中	低位段丘	23	宮ノ前	弥後～古前	〃	44	山郷山	弥後	〃
3	牛岡	鰐・奈～中	〃	24	後沢	弥中～古前	〃	45	深谷	鰐・弥後～古前	〃
4	社宮寺	鰐	丘陵	25	郷下	弥後	低位段丘	46	安養寺	弥後～古前	〃
5	向畠	鰐・弥後	〃	26	往原北	弥後～古前	丘陵	47	山口	弥後	低位段丘
6	清水	散布地	〃	27	原ノ前	弥後	下位段丘	48	堀之内	弥後～古前	〃
7	横手	〃	〃	28	大蔵	弥後～古前	丘陵	49	大平山	弥後	丘陵
8	水井	〃	〃	29	大久保	〃	〃	50	西田	弥後	〃
9	白沢	〃	扇状地	30	池向	弥後	低位段丘	51	内籠	弥後	〃
10	作手沢	〃	丘陵	31	踊原	弥後～古前	丘陵	52	大多郎	弥後	〃
11	田ノ谷	〃	〃	32	原山	弥後～古前	丘陵	53	宝田	弥後～古前	〃
12	池下	〃	〃	33	畠中	弥中～後	平野	54	御所原	弥中～古前	〃
13	西石原久保	〃	〃	34	日影谷	弥後～古前	丘陵	55	三城久保	弥後～古前	〃
14	大向	鰐中	〃	35	大六山	鰐・弥中～古前	〃	56	子角山	弥後	〃
15	木ノ下	鰐晚・弥後	〃	36	中西	弥後～古前	下位段丘	57	城内	弥後	〃
16	メノト	鰐前	平野	37	天神	〃	低位段丘	58	天王山	弥中～古前	〃
17	栗下	鰐晚	低位段丘	38	神子地	〃	〃	59	原新田	弥後～古前	〃
18	權現原	弥後～古前	下位段丘	39	下川原	〃	〃	60	下西郷	〃	平野
19	狐鼻	鰐中・弥中～後	〃	40	寺峯	〃	下位段丘	61	元下俣	弥中	下位段丘
20	新田	弥後	〃	41	古明	〃	低位段丘	*立地は土地条件図(国土地理院)による。			
21	中屋敷	〃	〃	42	半山	〃	丘陵				

第1表 周辺遺跡地名表

15

16

17

18

19

20

21



第3図 向烟跡遺構全体図

第III章 向畠遺跡の遺構と遺物

第1節 調査の概要

調査区北側は逆川に面した急峻な崖で、調査区内は北縁を稜線にして南西方向に緩やかに傾斜して行く。表土は比較的軟らかい暗褐色土で、上面は腐葉土である。全体的には30~50cm程度を持ち、遺物を包含している。表土直下は黄褐色土（地山）で、上面が遺構確認面となる。黄褐色土は粘性を持ち、小砾を含んでいる。遺構覆土は当初黒色土と考えられたが、基本的には暗褐色土である。縄文時代と弥生時代の遺構の区別は、覆土では難しく、若干縄文時代の方が黒味が強いと言える程度である。黄褐色土面に広がる黒色土は、あたかも遺構状を呈するが、いずれも木の根による擾乱と考えられる。その中の幾つかは土坑状をなす風倒木跡であった。遺構の検出は、上述の黒色土や地形の傾斜により住居跡等の南西壁が流失していたため意外に困難であった。そのため、数度にわたって遺構検出を繰り返した。最終的には遺物を包含していたことから、黒色土及び風倒木跡の調査も行なった。

検出された遺構は、竪穴住居跡12・掘立柱建物跡1・土坑10・溝3・小穴多数である（第3図）。出土遺物は、縄文土器・石器・弥生土器・山茶碗・銅鏡がある。以下、各時代別に遺構と遺物について触れて行くこととする。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代と考えられる遺構は、竪穴住居跡1・土坑5・小穴がある。小穴は弥生時代と区別できず、縄文土器を出土しているものは4個だけである。また、ニ19グリッドからは土器と石器が比較的まとまって出土しており、住居跡等の遺構があった可能性がある。土器が出土しているS P105とS P127は、これに関わるものと思われる。遺物は遺構からの出土は少なく、ほとんどが表土や弥生時代の遺構に混入していたものである。若干ではあるが、黒色土中からも出土している。

竪穴住居跡

S B106（第4図 図版4-1・2）

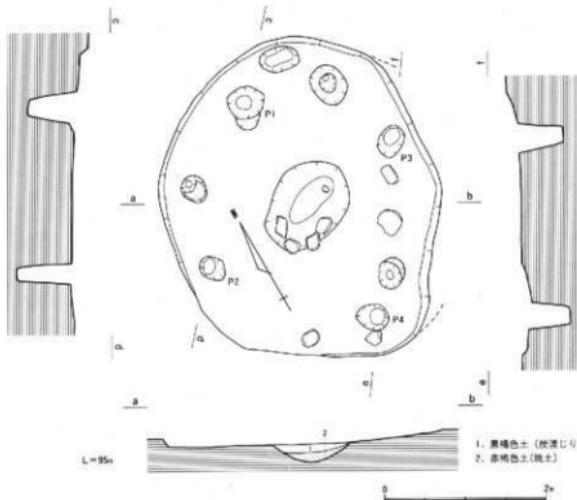
竪穴住居跡S B106は、ロ18・19・ハ18・19グリッドから検出された。東西3.5m・南北3.8mで、不整形な楕円形を呈するが、本来は円形であったと考えられる。掘り込みは浅く、北と西壁で検出面から10cm前後を測る。覆土は炭混じりの黒褐色土で、床面には砾と共に炭や炭化材が散在していた。貼り床は認められず、床面も堅く締まった様子は見られなかった。炉跡はほぼ中央に位置する。長径1.2m・短径90cm・深さ20cmの東西に長い楕円形土坑を呈し、掘り込みは椀状である。上層に炭混じりの黒褐色土、下層に焼土が厚さ10cm認められた。また、南側には20cm前後の4個の躙が、炉穴を囲むように配石されていた。炉跡を中心にして、8個の小穴が壁際から検出された。その中で、P1~P4は50~70cmと他に比べて深く、この4本が主柱穴と考えられる。

出土遺物は少なく土器片だけで、床面から出土した砾にも使用痕は認められなかった。図示できた土器は、第6図の1だけである。1は口縁部近くの破片で、弧状に沈線を巡らしている。器厚は5mmと薄く、明瞭褐色を呈する。1片の土器からではあるが、竪穴住居跡の時期は縄文時代中期後葉と推定している。

土坑

S P115（第5図 図版4-3）

土坑S P115はニ17グリッドに位置し、S B109の掘り方確認時に検出された焼土坑である。長軸86cm・短軸77cm・深さ25cmで、東側がやや広い長方形を呈する。掘り込みは箱状で、中央がやや窪み、西壁の



第4図 S B106実測図

傾斜が緩やかとなる。覆土は3層に分かれ、下部に厚さ5cm前後の焼土が認められ、地山である黄褐色土まで赤く焼けていた。

出土遺物は小量の土器片だけで、図示できた土器は第6図の2だけである。2は押型文土器で、格子目文を施す。目は一辺8mmと粗く、器厚は7mmで暗褐色を呈する。遺構の時期は、この土器から縄文時代早期と考えられる。

S P120 (第5図 図版4-4)

土坑S P120は、ロ19グリッドから検出された焼土坑である。長径1m・短径90cm・深さ40cmで、ほぼ円形を呈する。掘り込みは椀状で、北側は2個の小穴と重複していた。覆土は上層が暗褐色土で、下層に厚さ10cm前後の焼土が認められた。

覆土中から縄文土器と考えられる小量の土器片が出土している。

S P123 (第5図 図版4-5)

土坑S P123は、ロ19グリッド・S P120北西から検出された焼土坑である。長径1.06m・短径95cm・深さ20cmで、ほぼ楕円形を呈し、掘り込みは椀状である。覆土は上層が暗褐色土で、下層に厚さ5cm前後の焼土が認められた。焼土上面には、10~25cm程の4個の疊が混入していた。

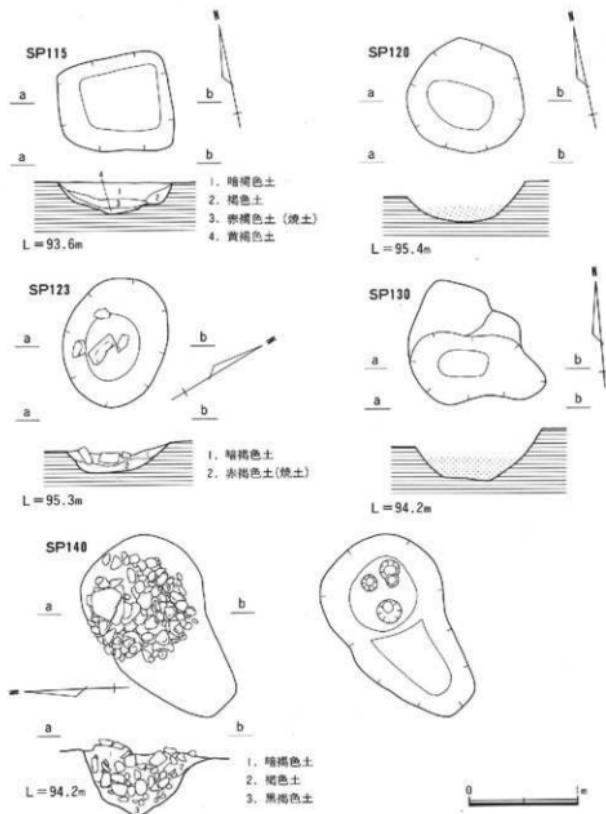
覆土中からは、縄文土器と考えられる小量の土器片が出土している。

S P130 (第5図)

土坑S P130は、ニ18グリッドから検出された焼土坑である。長径1.1m・短径1m・深さ40cmで、北側が他の小穴と重複しているためか不整形となるが、ほぼ楕円形を呈していたと思われる。掘り込みは椀状で、上層に暗褐色土、下層に厚さ20cm前後の焼土が認められた。

出土遺物は全くないが、上記の土坑と共に通していることから縄文時代に属すると考えた。

S P120・S P123・S P130の3つの焼土坑は、配石は認められないがS B106の炉跡と形態的に類似



第5図 S P115・S P120・S P123・S P130・S P140実測図

しており、炉跡と考えられる。周囲に柱穴の配置が確認されなかったことから屋外炉と考えられるが、住居跡である可能性も否定できない。

S P140 (第5図 図版4-6-7)

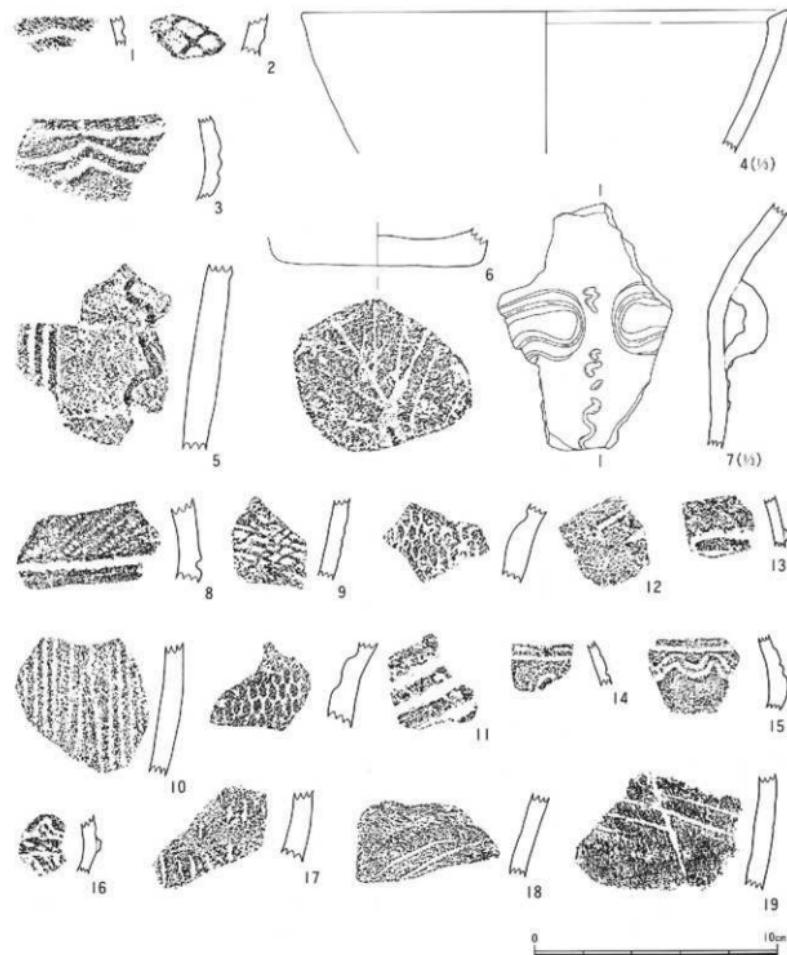
土坑S P140は、ハ18グリッドから検出された集石土坑である。長径1.7m・短径1m・深さ50cmで、平面形態は不整形な楕円形を呈する。土層からは確認できなかったが、形状から他の遺構と重複していた可能性があり、本来は径1m程の円形土坑であったと推測している。上面では5~20cm程の礫が径90cm程の範囲に多数広がり、礫は土坑下層まで入り込んでいた。覆土は3層に分けられ、炭や焼土が混入していた。土坑底部には、径10~20cm・深さ10cm前後の小穴が4個検出されている。

出土遺物は全くなく、土坑内の礫にも焼けたものはあったが、使用痕は認められなかった。時期については不明と言わざるを得ないが、形状と覆土から縄文時代の遺構に含めた。

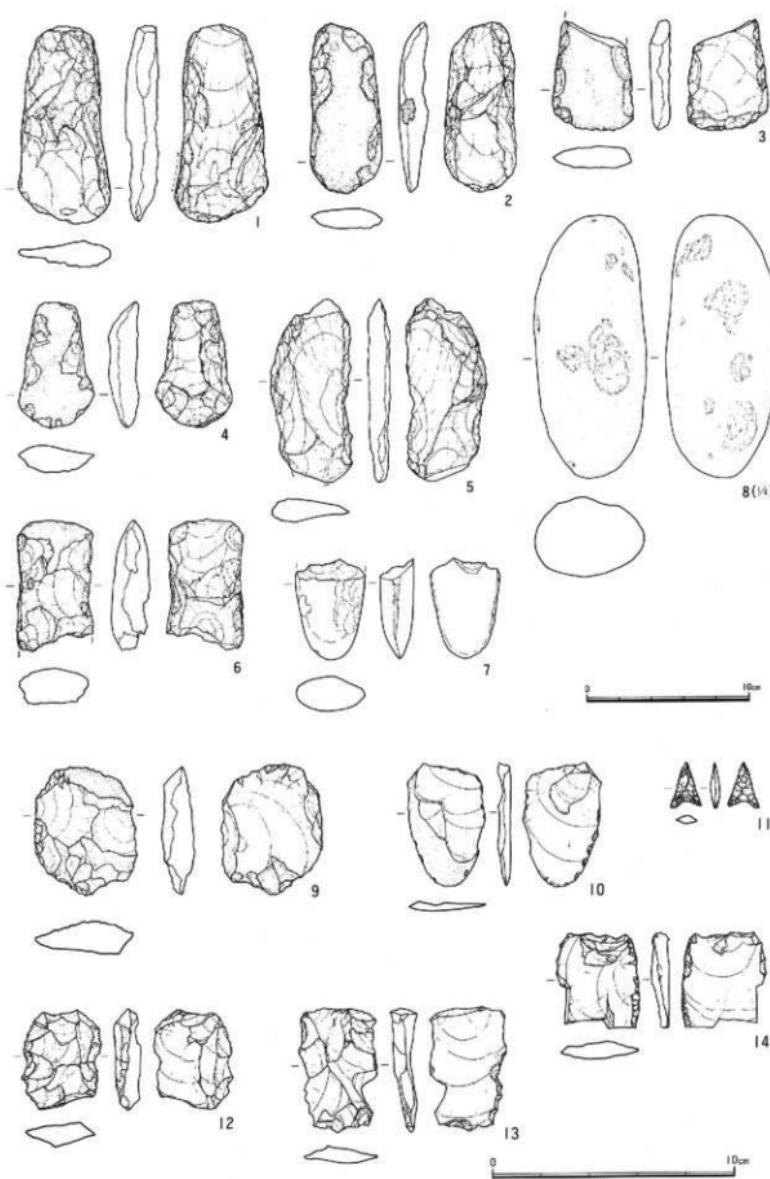
小穴及び包含層出土遺物

土器（第6図 図版II）

上記の遺構以外から出土した土器は、第6図の3～19がある。器種は全て深鉢と考えられる。3は口縁部近くの破片で、3条の沈線を施し、下2条は弧状に巡らしている。4・5・7は同一固体と考えられる。口縁部は無文で内縫気味に開き、口唇部は内傾する。頸部にx状把手が付き、把手から紐状隆帯を波状に垂下させる。胴部地文は繩文で、隆帯と平行して半截竹管による隆起線を施す。6は底部で、外



第6図 出土遺物実測図（1）



第7図 出土遺物実測図（2）

面に木葉痕が見られる。8は胴部破片で、地文に縄文を施し、隆起線で区画される。3～8はニ19グリッドのS B104北側から出土し、その内4・7はSP127から出土している。9は押型文土器で、格子目文を施している。目は一辺5mmと細かく、器厚は7mmで暗褐色を呈する。ロ19グリッドから出土している。10は胴部破片で、半截竹管による縁位の平行沈線を施している。ハ19グリッドから出土している。11・12は同一固体と考えられる押型文土器で、横円文を施す。横円は7×3mmで、施文方向は縁位である。口縁部内部に斜位の太く深い沈線を施す。ハ18グリッドから出土している。13は口縁部近くの破片で、横位に細い隆帯を貼付する。14・15は口縁部近くの破片で、同一固体と考えられる。外面に半截竹管による平行線文と弧状文を施している。ともにハ17グリッドから出土している。16は地文に粗い網文を施し、細い隆帯を貼付し、隆帯には刻み目が見られる。17は胴部破片で、ヘラ状工具によって列点文を施す。ともにニ17グリッドから出土している。18・19は胴部破片で、同一固体と考えられる。沈線の方向が異なることから、ヘラ状工具による羽状沈線文を施していると考えられる。ともにニ18グリッドから出土している。

各土器の時期については、まとめて触ることにする。

石器（第7図 図版12）

石器は全部で14点が出土し、打製石斧・磨製石斧・石鎌・凹石・剥片石器がある。1は短冊形の打製石斧で、刃部がやや広がる。法量は、重さ159.2g・長さ12.2cm・幅5.7cm・厚さ2.02cmである。2は短冊形の打製石斧で、法量は重さ79.7g・長さ10.44cm・幅4.4cm・厚さ1.79cmである。3は短冊形の打製石斧で、基部を欠く。法量は、幅5cm・厚さ1.2cmである。4はやや小型の撥形の打製石斧で、法量は重さ67.8g・長さ7.75cm・幅4.66cm・厚さ1.75cmである。1～4はニ19グリッドから出土しており、土器3～8に伴うものと思われる。5は短冊形の打製石斧で、刃部が欠損している。法量は、重さ79.9g・長さ11.25cm・幅4.77cm・厚さ1.33cmである。ニ18グリッドから出土している。6は短冊形の打製石斧で、中央がややくびれ、刃部を欠く。法量は幅4.7cm・厚さ2.1cmで、他に比べ厚手である。ニ16グリッドから出土している。石材はすべて砂岩である。7は磨製石斧で、基部を欠く。刃部は先細りの始刃で、ほぼ全面を研磨し、側縁を潰している。石材は砂岩である。8は凹石で、扁平な砂岩の円錐を利用している。上下面に径3～5cmの窪みが3ヶ所あり、数ヶ所に小さな打撃痕が認められる。9・10・12～14は加工痕のある剥片で、いずれも一方の側縁に調整加工を施している。10と14は薄手の剥片で、比較的細かな調整を加えている。これらはスクレイパーとして用いられたと考えられる。いずれも石材は頁岩で、10・13は黒灰色を呈する。出土地点は9・10がハ19グリッド、12・13がニ17グリッド、14がニ16グリッドである。11は黒耀石製の無茎石鎌で、基部に抉りを持つ。法量は、長さ1.8cm・幅1.3cm・厚さ0.4cmである。ニ17グリッドから出土している。

各石器の時期については、土器との明確な伴出がなく不明な点が多い。1～4の打製石斧は、同一地点から縄文時代中期後葉の土器が出土していることから、おそらくこれに伴うものと考えている。他の打製石斧と石鎌についても同様と考えたい。磨製石斧と剥片石器は、三沢西原遺跡（菊川町1985）に類例があり、縄文時代早期押型文土器に伴うものと推定している。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代と考えられる遺構は、竪穴住居跡11・掘立柱建物跡1・溝3・小穴である。小穴はロ20グリッドとホ16グリッド付近に比較的まとまって検出されたが、建物としての配列は確認できていない。出土遺物は土器だけで、ほとんどが竪穴住居跡から出土している。出土土器は、いずれも弥生時代後期の菊川式に属するものである。なお各住居跡の主軸方位は、基本的には炉跡が片寄る方向を基軸として表記している。

竪穴住居跡

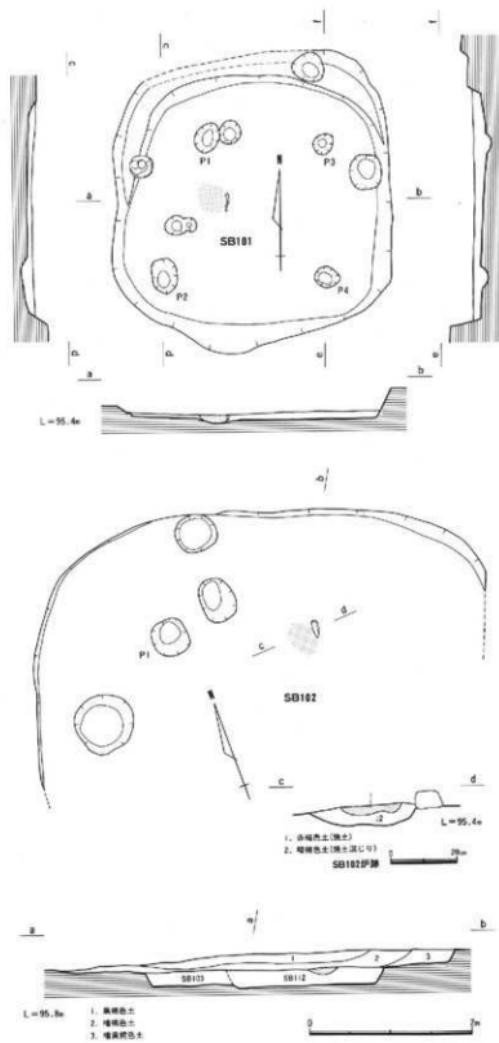
S B101 (第8図 図版5-1・2)

竪穴住居跡S B101は、ハ20グリッドから検出された。平面形態は胴張りの隅丸方形で、北側壁は二重となり、土器の出土状態や土層から拡張がなされたと考えられる。外側壁の一部は斜面にあたり、流失している。東西3.4m・南北3.3m（内側）・推定3.5m（外側）で、検出面から床面までの深さは南と東壁で20～30cm程度である。主軸は炉跡の位置を基準にするとN-88°～Wで、ほぼ真西となる。覆土は暗褐色土で、床は黄褐色土ブロック混じりの土で貼り床を施している。床面は比較的堅く締まり、炭が広がっていた。掘り方は床面下10cm程を全体に掘り込んでおり、中央部がやや窪む。炉跡は中央西寄りに位置し、東側に細長い礫を埋め込んでいる。焼土は掘り方面まで及び、下部は皿状の窪みとなる。掘り方面検出時に8個の小穴が確認された。配置としてはP1～P4を柱穴と考えたいが、いずれも浅く断定できない。

出土土器は少なく、図示できたものは第9図の20～22だけである。20は大型の壺で、胸部最大径26.5cmを測る。外面底部付近にはハケメが残り、内面にはナデを施している。21は壺の口縁部破片で、折り返し口縁を呈し、外面に縦位の沈線を施す。22は比較的小型の台付壺脚部で、やや内彎して開く。

S B102(第8図 図版5-3・4)

竪穴住居跡S B102は、ロ19・ロ20グリッドから検出され、S B103・S B112と重複している。壁は北側部分しか確認できなかったが、平面形態は胴張りの隅丸方形と推定される。規模は形状と土層図から



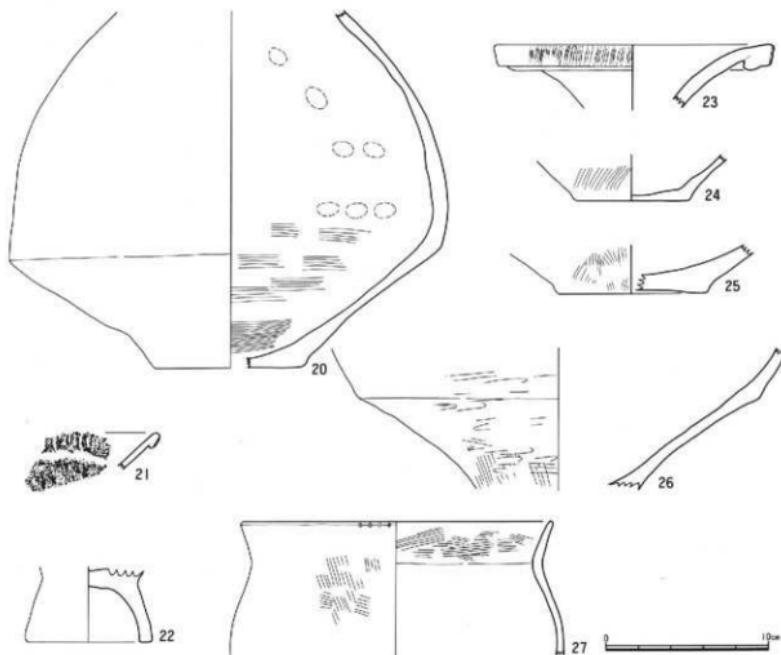
第8図 S B101・S B102実測図

類推すると、東西5.5m・南北4.8mとなる。主軸は炉跡の位置を基準にするとN-21°-Eである。検出面から床面までの深さは北壁で15cm程度で、覆土は①黒褐色土・②暗褐色土・③暗黄褐色土に分層される。北壁付近を見るかぎり、貼り床は施されておらず、床面はほとんど締まった様子はなかった。炉跡は中央北東寄りに位置し、東側に扁平な縫を置く。焼土下には暗褐色土が認められ、皿状の窪みとなる。北西部において4個の小穴が検出された。配置としてはP1が柱穴である可能性が高い。S B103・S B112との重複関係は、S B103-S B112-S B102である。

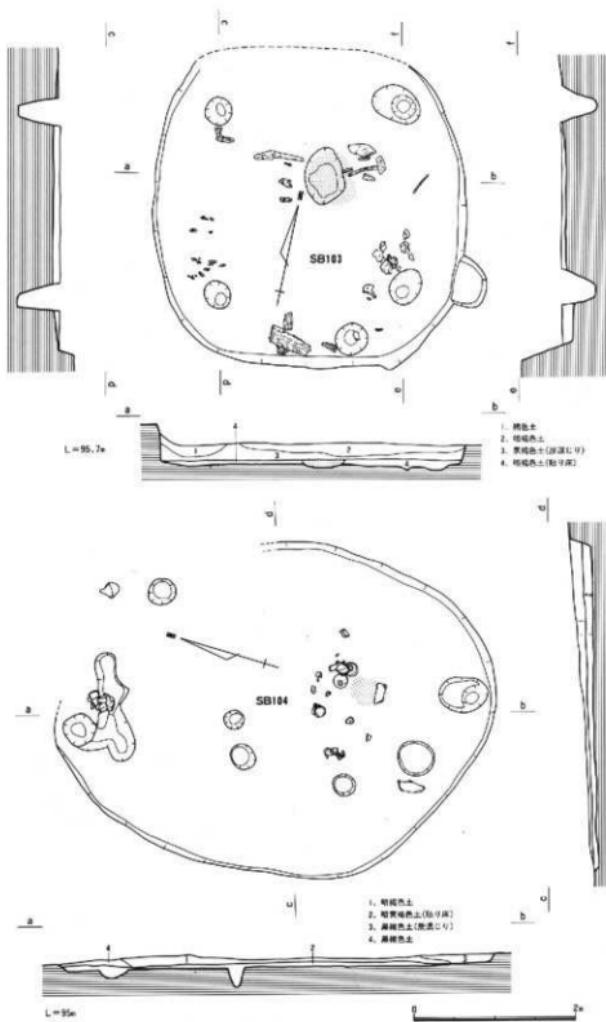
出土土器は、第9図の23~27の5点がある。23は壺の口縁部破片で、折り返し口縁を呈する。口縁部断面形は方形で、外面に縦位の沈線を施す。24~26は壺の底部である。26は大型で、胴部下半にヘラ磨きを施している。27は台付壺で、口唇部に刻みを持ち、外面と口縁部内部にハケメ、胴部内面にナデを施している。

S B103 (第10図 図版5-4、6-1・2)

堅穴住居跡S B103は、口19・ロ20グリッドから検出され、北壁をS B112によって切られている。東西3.9m・南北推定4mで、胴張りの隅丸方形を呈する。主軸は炉跡の位置を基準にするとN-13°-Wである。検出面から床面までの深さは南と西壁で50cm・東壁で20cmで、覆土は3層に分層される。覆土下層と床面には焼土や炭化材が多量に混入し、焼失家屋の可能性がある。床は黄褐色土ブロック混じりの土で貼り床が施され、床面は堅く締まっていた。掘り方は床面下10cm程を全体に掘り込んでおり、表



第9図 出土遺物実測図(3) (20~22 S B101・23~27 S B102)

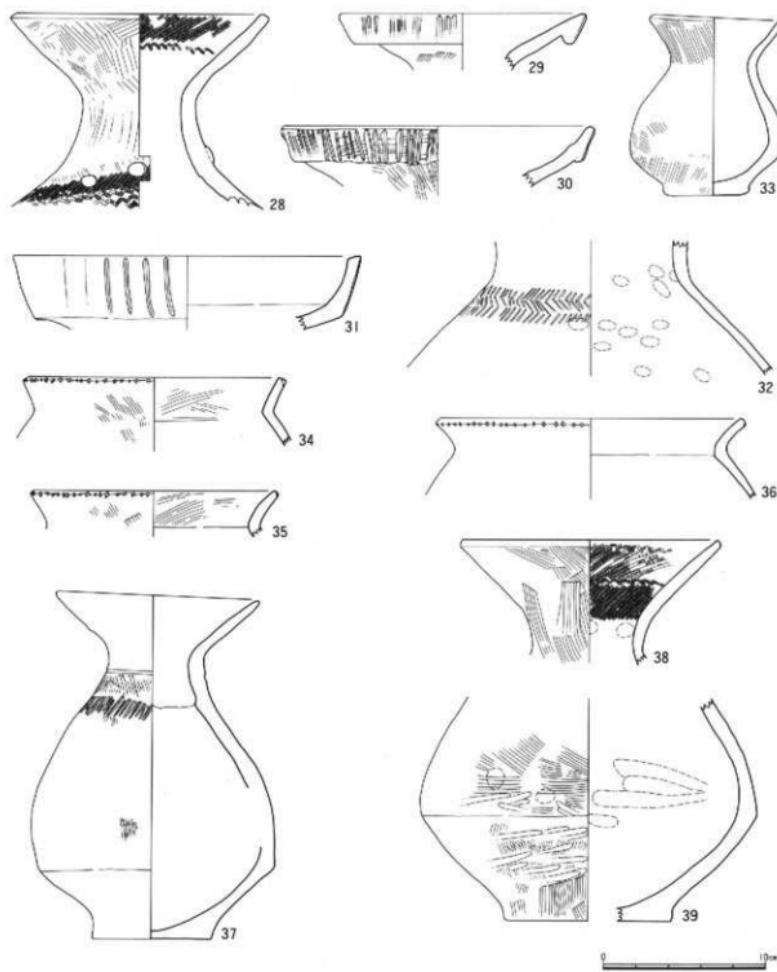


第10図 S B103・S B104実測図

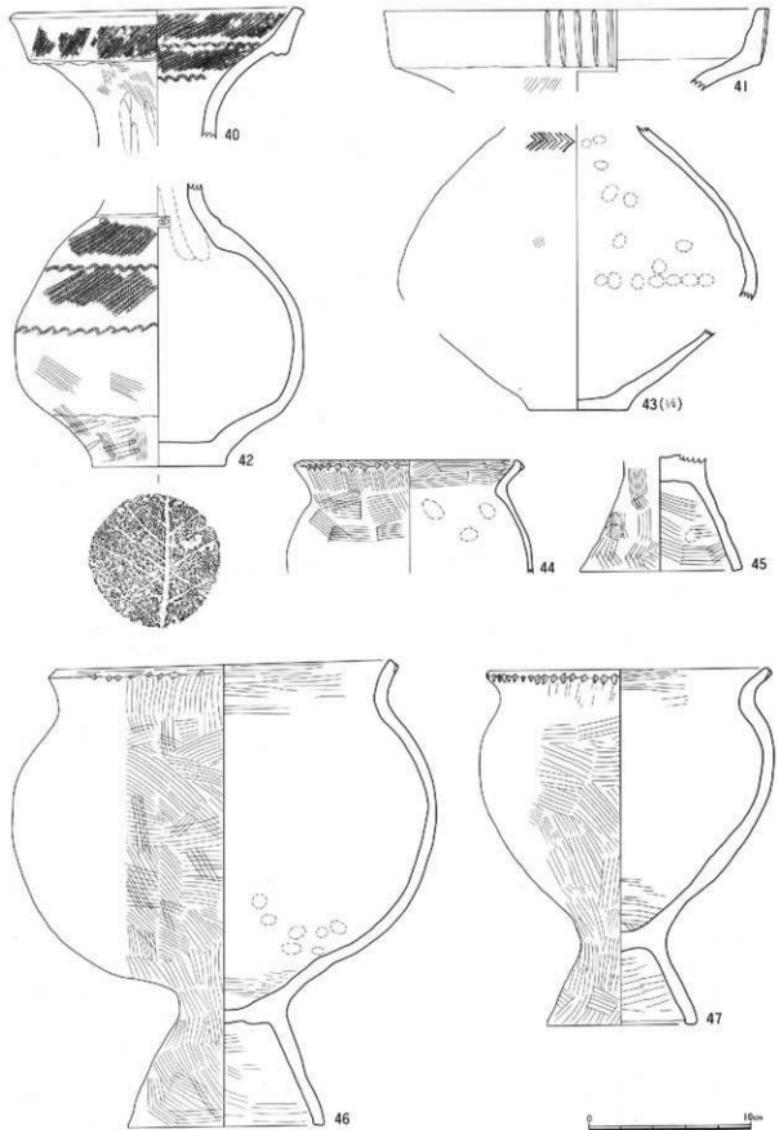
面には細かな凹凸が見られた。炉跡は中央北寄りに位置し、焼土は厚さ10cm程で掘り方面まで及び、下部は皿状の窪みとなる。柱穴は掘り方面検出時に4本検出され、いずれも円形で50cm程の深さを持つ。南東部壁際からは径50cm程の小穴が確認され、中から小型壺が出土している。

出土土器は第11図の28～36がある。28は単純口縁の壺で、口縁部は内彎して立ち上がり、口唇はナデ

によって面取りされる。外面全体にハケメを施した後、頸部には縦方向のヘラ磨きを施す。肩部と口縁部内面にはS字状結節繩文を施し、肩部には5ヶ所に円形付文を貼付している。29は折り返し口縁の壺で、外面に縦位の沈線を施し、断面形は三角形となる。30は複合口縁の壺で、口縁部は内彎して立ち上がり、外面は幅狭で下部を垂下させる。外面にはハケメの後に縦位の沈線を施す。31は複合口縁の壺で、口径21.4cmと大型である。外面は幅広で、間隔の広い沈線を施している。32は壺の肩部で、櫛刺突羽状文を施す。33は単純口縁の小型壺で、外面全体にハケメを施した後に胸部に粗いナデを加えている。34～



第11図 出土遺物実測図(4)(28～36 S B103・37～39 S B104)



第12図 出土遺物実測図（5）(40~47 S B104)

36は台付壺で、口縁部は頸部からくの字状に屈曲し、口唇に刻みを持つ。

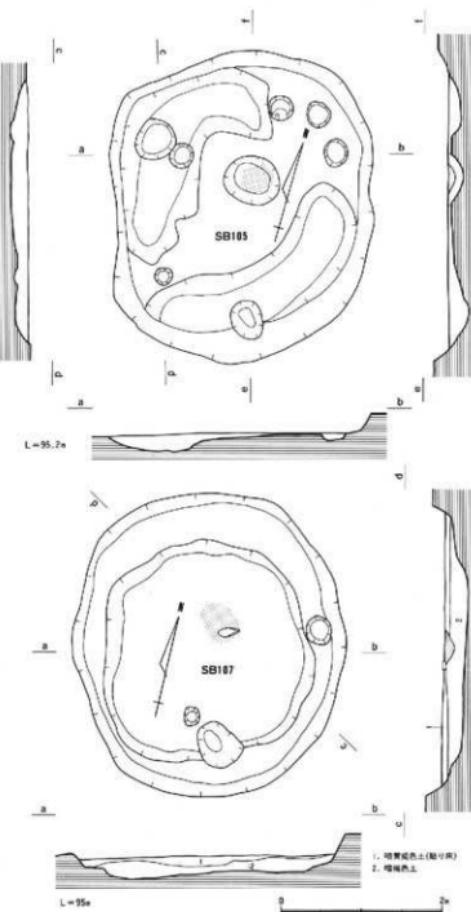
S B104 (第10図 図版6-3-4)

堅穴住居跡S B104は、ハ19・ニ19グリッドから検出され、東側はSX103(風倒木跡)と重複し、北側は縄文時代の遺構と重複していた可能性を持つ。SX103との前後関係は土層では確認できていない。平面形態は、東西4.2m・南北推定5mの不整形な楕円形を呈する。炉跡の位置からすると、2軒の重複があったとも考えられるが、確認できなかった。主軸は長軸をとるとN-4°-E、炉跡を東にとるとN-100°-Eとなる。検出面から床面までの深さは10cm前後で、覆土は3層に分層される。(2)層が貼り床と考えられるが、床面はほとんど堅く締まった様子は認められなかった。

掘り方は、床面下10cm程を全体に掘り込んでいる。炉跡は中央南東寄りに位置し、南側に扁平な躙を置く。ほとんど焼けておらず、焼土混じりの黒褐色土が広がっていた。掘り方検出時に小穴がいくつか検出されたが、確かな柱穴は確認できていな

い。

出土土器は第11図と第12図の37～47があり、床面から比較的まとまった資料が得られた。37は単純口縁の壺で、口縁部は内脣気味に開き、胴部は無花果状を呈する。頸部に1条の沈線を巡らし、沈線下に櫛刺突羽状文を施す。38は口唇部を面取りし、外面上にハケメ、内面上にS字状結節縄文を施す。39は壺の胴部で、外面上全体にハケメを施した後に下半部にヘラ磨きを施す。40・41は複合口縁の壺で、40は口縁部内外面に縄文、41は外面上に縱位の沈線を施す。42は壺の胴部で、球形に近い。肩部に1条の沈線を巡らし、沈線下にS字状結節縄文を施し、底部外面上に木葉痕を持つ。43は大型の壺で、肩部に櫛刺突羽状文を施す。44～47は台付壺で、いずれも口唇部に刻みを持ち、脚部は直線的に開く。44は口縁部が頸部からくの字状に屈曲する。46は大型で口縁部は緩やかに外反し、胴部は球形となる。47は比較的小型で、口縁部は強く外反し、胴部最大径は上部にある。



第13図 S B105・S B107実測図

S B105 (第13図 国版7-1)

竪穴住居跡S B105は、ロ19グリッドから検出され、西壁は流失していたため床面で確認した。東西3.3m・南北3.8mで、楕円形を呈する。主軸は炉跡の位置を基準になるとN-16°-Wである。検出面から床面までの深さは南と東壁で20cm・北壁で15cmで、覆土は暗褐色である。床は貼り床を施しているが、全体的には軟らかい。掘り方は中央部を高く残して周りを掘り込んでおり、北西隅と南東隅が溝状となり、深い所で床面下20cm前後を測る。炉跡は中央や北寄りに位置し、焼土下に暗褐色土が認められ、下部は皿状の窪みとなり、掘り方面まで及ぶ。掘り方面検出時にいくつかの小穴が検出されたが、いずれも浅く柱穴とは断定できない。

出土土器は少なく、いずれも壺や甕の小破片である。

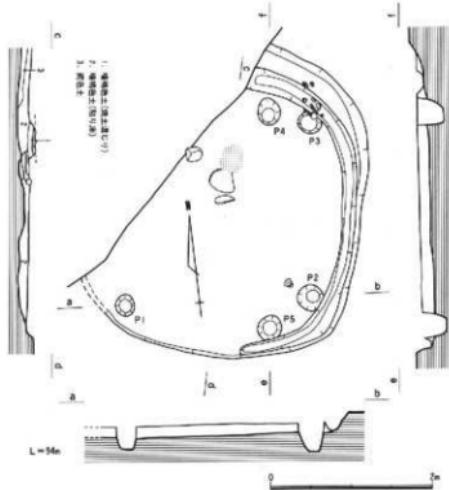
S B107 (第13図 国版7-2)

竪穴住居跡S B107は、ハ19グリッドから検出された。東西3.3m・南北3.7mで、楕円形を呈する。主軸は炉跡の位置を基準になるとN-14°-Wである。検出面から床面までの深さは東壁で20cm・西壁で10cm程で、覆土は暗褐色土である。床は黄褐色土ブロック混じりの土で貼り床が施され、床面は堅く締まっていた。掘り方は壁際を浅く残して、中央を深く掘り込むもので、深い所で床面下20~30cmを測る。炉跡は中央北寄りに位置し、南東部に扁平な礎を置く。焼土は厚さ10cm程で、下部は皿状の窪みとなる。床面下を数回に分けて掘り下がったが、柱穴は確認できなかった。

出土土器は少なく、図示できたものは第15図の48・49の2点のみである。48は壺の底部破片で、内外面にハケメが残る。49は台付甕の脚部で、内面にナデを施している。

S B108 (第14図 国版7-3)

竪穴住居跡S B108は、ニ18グリッドから検出され、北東部は崖崩れによって流失してしまっていた。炉跡が2面あることや北側で壁と壁溝がずれることから、建て替えがなされたと考えられる。土器の出土状態から外側壁の方が新しいと考えている。但し、調査時には確認できず、下層の床面まで下げてしまった。東西推定3.3m・南北3.6m(古)・3.9m(新)で、平面形態はどちらかと言えば楕円形に近い。主軸は炉跡の位置を基準になると、N-12°-W(古)・N-16°-W(新)である。新は検出面から床面までの深さは5cm前後で、覆土は暗褐色土である。床は古の床面に10cm前後貼り床を施しているが、床面はほとんど締まつた様子は認められなかつた。炉跡は中央北寄りに位置し、焼土は厚さ4cm前後残り、下層には焼土混じりの暗褐色土が認められた。古も貼り床を施しているが、床面はほとんど堅く締まつた様子は認められなかつた。東側部分からは、幅20cm・深さ10cm程の壁溝が検出された。掘り方は中央を高く残して周りを掘り込むもので、深い所で床面下15cm程を測る。炉跡は中央北寄りに位置し、新の炉跡よりや



第14図 S B108実測図

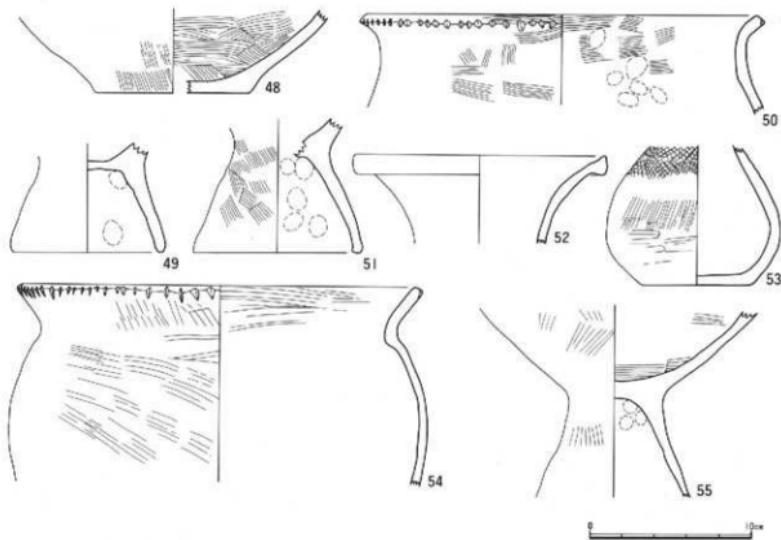
や南へずれる。炉跡の真上には30cm程の扁平な礫がおり、南側には細長い礫が置かれていた。焼土は厚さ10cm程で、下部は皿状の窪みとなり、掘り方面まで及ぶ。柱穴は、掘り方面検出時に5本検出された。P1～P3の組合せを新と想定したが、P4・P5ではやや中へ入り過ぎるようである。

出土土器は少なく、図示できたものは第15図の50・51の2点のみである。50は大型の台付壺で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部に刻目を施す。51は台付壺脚部で、やや内彎して開く。外面にハケメ、内面にナデを施している。

S B109 (第16図 図版8-1)

堅穴住居跡 S B109は、ニ17・ニ18グリッドから検出され、南側はS B110と重複している。東西6.8m・南北7.9mと大型で、平面形態は梢円形を呈する。主軸は炉跡の位置を基準にするとN-27°-Wである。検出面から床面までの深さは20cm程で、幅20cm・深さ10cm程の壁溝が全周する。覆土は炭混じりの黒褐色土で、床面や壁溝にも焼土や炭化材が散在し、焼失家屋の可能性がある。床は黄褐色土ブロック混じりの土で貼り床が施され、床面は堅く締まっていた。掘り方は中央を高く残して、周りを掘り込むもので、深い所で床面下10cm前後を測る。炉跡は中央北寄りに位置する。焼土は上下2面確認され、作り替えがなされたと考えられる。下層の焼土上面には、S B108同様に扁平な礫が混入していた。下面の焼土は掘り方面まで及び、下部は皿状の窪みとなる。柱穴は4本で、径50cm・深さ60cm程といずれも大きく深い。また、南東部には径70cm程の小穴が検出されている。S B110との前後関係は、壁溝の検出状況と土器の出土状況からS B110→S B109と考えられる。

出土土器は第15図の52～55の4点がある。52は折り返し口縁の壺で、口縁部断面形は三角形となる。53は小型壺で、口縁部を欠く。肩部に櫛刺突羽状文を施し、胴部はハケメの後に下半にヘラ磨きを施す。54・55は台付壺で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部に刻目を施している。

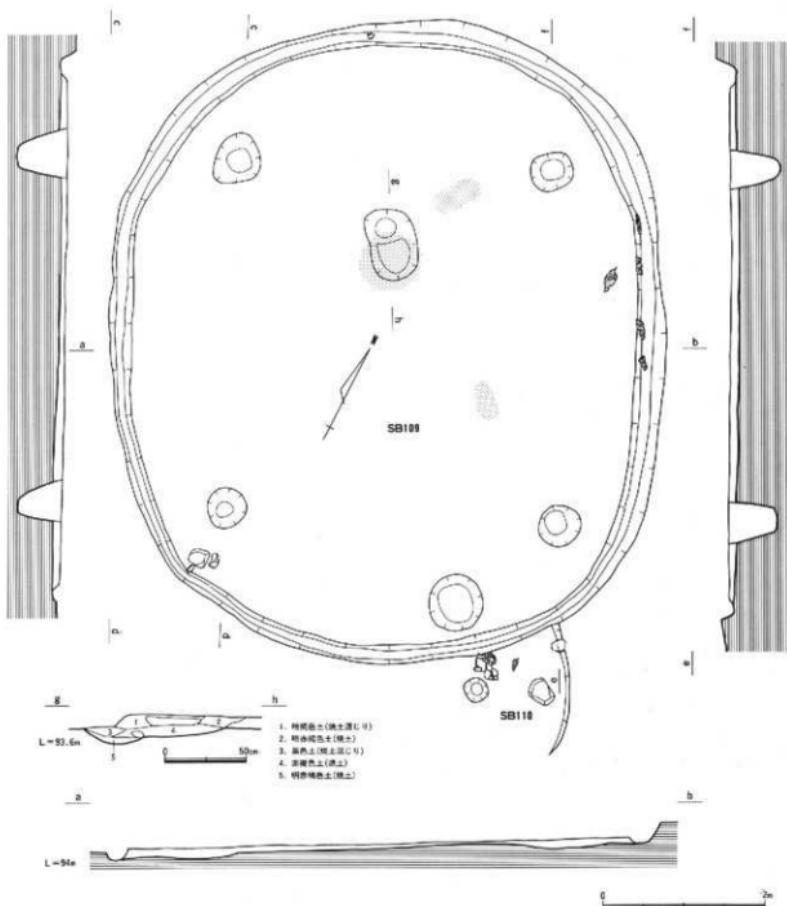


第15図 出土遺物実測図(6) (48・49 S B107・50・51 S B108・52～55 S B109)

S B110 (第16図 図版8-1・2)

竪穴住居跡S B110はニ17・ハ17グリッド、S B109の南側から検出された。北側はS B109に切られ、南西部は斜面部分に当たり検出できなかった。検出部分はほんの僅かであるが、平面形態が弧状を呈することから竪穴住居跡とした。検出部分は南東隅と考えられ、床面からは土器と礫が出土し、小穴が1個検出されている。床は厚さ10cm程の貼り床が施されていたが、床面は堅く締まった様子は認められなかった。掘り方の構造は、はっきり捉えることができなかった。

出土土器は台付甕があるが、いずれも胸部破片である。



第16図 S B109・S B110実測図

S B111 (第17図 図版8-3・4、9-1)

竪穴住居跡S B111はニ18グリッドから検出され、東壁は崩壊のためか外にふくらんでいる。東西3.3m・南北4m・深さ15cm程で、平面形態は梢円形を呈する。北壁から東壁にかけて、幅20cm前後・深さ10cm程の壁溝が検出されている。主軸は炉跡の位置を基準にするとN-7°-Wである。床は黄褐色土ブロック混じりの土で貼り床が施され、床面は堅く締まっていた。東壁付近の床面からは甕3個が出土している。掘り方は中央を高く残して、周りを掘り込むもので、深い所で床面下15cm前後を測る。炉跡は中央北寄りに位置し、焼土は厚さ10cm程で南側に細長い礫を埋め込んでいる。柱穴は4本で、径30~40cm・深さ20~50cmとややばらつきがある。いずれも掘り方面検出時に確認している。また、南東部には径70cm程の小穴が検出され、中から甕と甕が出土している。

出土土器は第19図の56~60の5点がある。56は壺で口縁部を欠く。胴部上半にはS字状結節縞文を2段施す。57~60は台付甕で、口縁部は緩やかに外反し、外面と口縁部内面にハケメ、内面にナデを施す。57・58は口唇に刻目を施すが、59は刻目を持たない。

S B112(第17図 図版5-4)

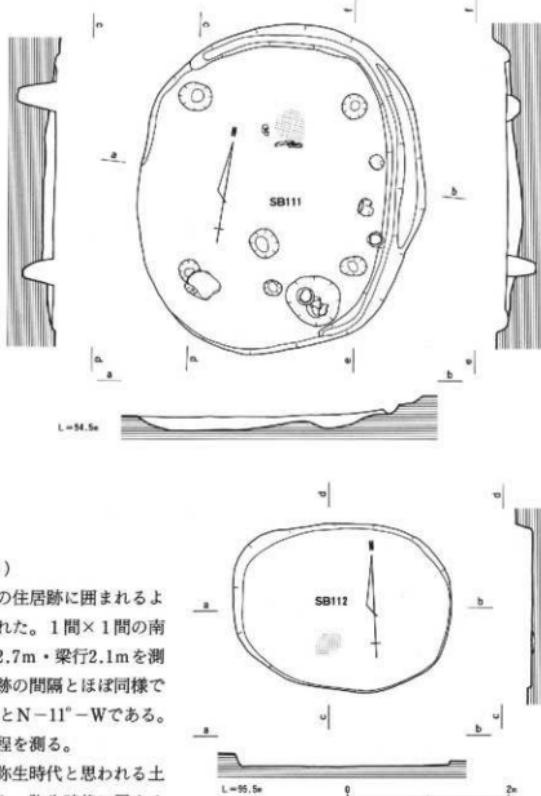
竪穴住居跡S B112はロ20グリッド、S B102下部から検出された。東西2.7m・南北2.1m・深さ20cm程と小型で、平面形態は梢円形を呈する。主軸は長軸をとるとN-87°-W、炉跡を南にとるとS-4°-Wである。貼り床は施されておらず、床面にはほとんど汚れは認められなかった。炉跡は南西寄りに位置し、焼土は厚さ5cm程であった。柱穴は検出されず、出土遺物も全く認められなかった。

掘立柱建物跡

S H101 (第18図 図版9-2)

掘立柱建物跡S H101は、他の住居跡に囲まれるようにハ18グリッドから検出された。1間×1間の南北棟の倉庫と考えられ、桁行2.7m・梁行2.1mを測る。柱間の間隔は、竪穴住居跡の間隔とほぼ同様である。主軸は長軸を基準にするとN-11°-Wである。柱穴は径40~50cm・深さ30cm程を測る。

検出位置や北西の柱穴から弥生時代と思われる土器片が出土していること等から、弥生時代に属するものと考えられる。



第17図 S B111・S B112実測図

溝状遺構（第3図）

S D101

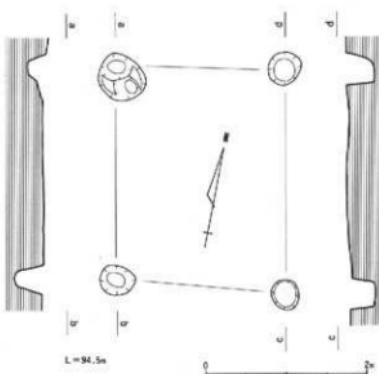
SD101はロ20・ロ21グリッドから検出された溝状遺構である。北東から南西に伸びて、中央部は土坑と重複する。平面形態は不整形で、規模は長さ4.7m・幅1m程・深さ20cm前後を測る。覆土は暗褐色土で、土器片が出土している。

S D102

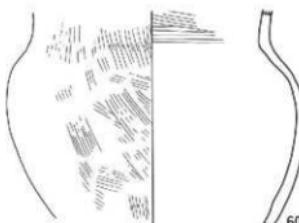
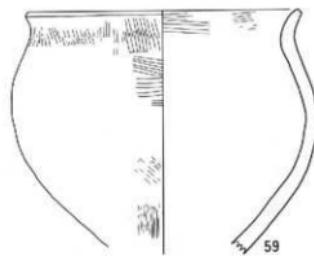
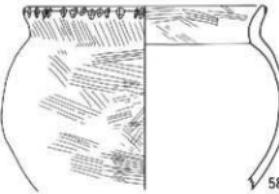
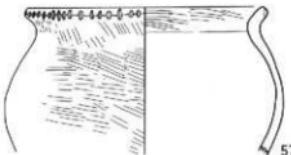
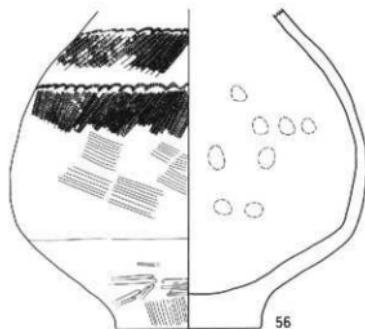
SD102はロ20・ハ20グリッドから検出された溝状遺構である。北から南に伸びて、南端はSB102と接する。規模は長さ7m・幅1.5~2.5m程・深さ10~20cm程で、北側がやや広がる。覆土は暗褐色土で、出土遺物はない。

S D104

SD104はニ17グリッドから検出された溝状遺構である。北西から南東に伸びて、南側は斜面で不明瞭となる。規模は長さ6.5m・幅1m前後・



第18図 SH101実測図



0 10cm

第19図 出土遺物実測図(7) (56~60 SB111)

深さ10~20cm程で、南に向かって傾斜する。覆土は暗褐色土で、土器片が出土している。

包含層出土土器 (第20図 図版15)

遺構以外の弥生土器は第20図の61~69があり、ほとんどが堅穴住居跡上面からの出土と思われる。61~63は壺の底部破片で、64~69は台付甕である。64の台付甕脚部は端部を折り返している。

第4節 その他の遺構と遺物

縄文時代と弥生時代以外の遺構としては、S P 101がある。また遺構ではないため図示しなかったが、風倒木跡 (S X) が大きいもので7箇所程確認されている。

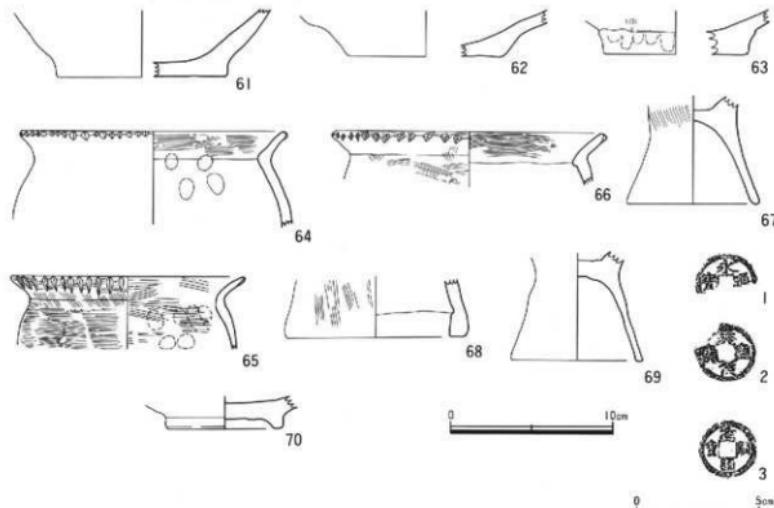
S P 101 (第3図)

S P 101は二18グリッドから検出された、径30cm・深さ20cm程の小穴である。覆土は褐色土で、比較的軟らかい。覆土中からは5枚の銅鏡が出土している。残りの良い3枚の拓影図を第20図に掲載した。1は永樂通寶・2は熙寧通寶・3は元祐通寶である。

風倒木跡

平面では黄褐色土（地山）を暗褐色土あるいは黒色土がドーナツ状に囲むように検出される。木が倒れたことによって黄褐色土が起こされ、その隙間に他の土が入り込んだものと考えられる。そのため下部は径2~4m程の土坑状となる。図版9-3にSX106の検出状況を掲載した。入り込んだ土は二つに分かれ、倒れた時期が異なる。黒色土は弥生時代の住居跡に切られており、縄文土器を含んでいることから、縄文時代以降弥生時代以前と推定される。暗褐色土は弥生時代の住居跡覆土と区別できないことからも、弥生時代以降に倒れた可能性が高い。西側に土が多く混入していることから、ほとんどの風倒木が東に倒れたと考えられる。風倒木跡は、掛川市内吉岡原の中原遺跡・高田遺跡などに調査例がある。

その他の遺物としては、第19図・70の山茶碗が表土中から1点出土している。深碗の底部破片で、高台は断面三角形を呈し、比較的高い。外面には糸切り痕が残り、高台端部には楞痕が見られる。時期は平安時代末から鎌倉時代と推定される。

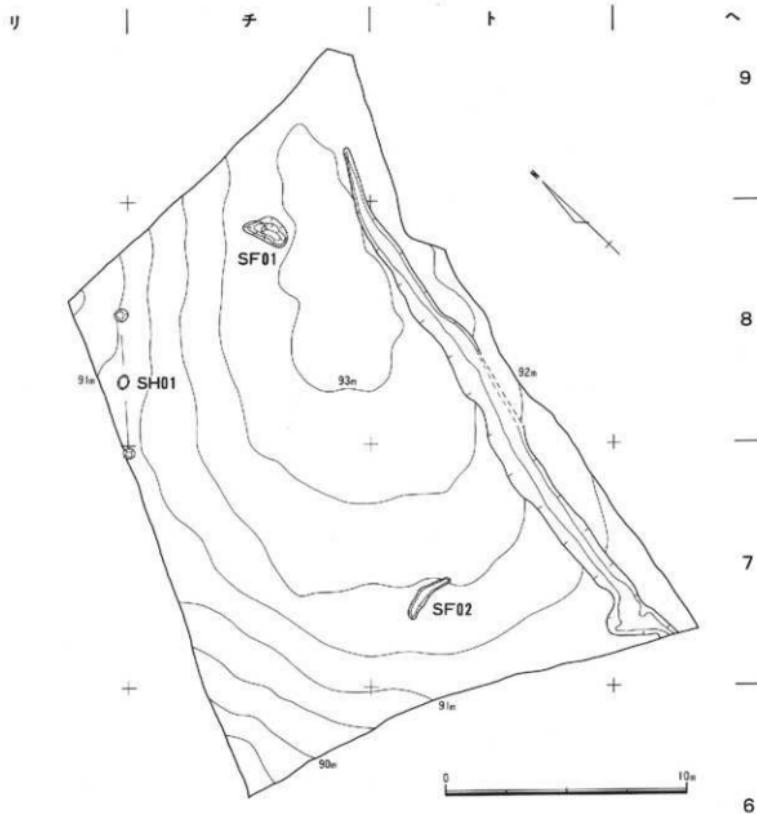


第20図 出土遺物実測図 (8)

第Ⅳ章 社宮寺遺跡の遺構と遺物

第1節 調査の概要

調査区の北側と東側は急峻な崖で、調査区内は北東部のチ9からチ8グリッドを頂部に南西方向に向かって傾斜していく。傾斜は南に向かって比較的緩やかであるが、西はやや急となる。表土を除去してしまうと平坦部は少なく、調査区内の比高差は4m程になる。茶園であったため表土は耕作土で、40~50cm程の厚さを持つ。表土直下は砂質の強い黄褐色土（地山）で、上面が遺構確認面となる。黄褐色土上面は耕作が深く入り、所々擾乱を受けていた。また西側の斜面部分では黄褐色土ではなく、下層の砂礫層が露頭していた。



第21図 社宮寺遺跡遺構全体図

検出された遺構は土坑2・小穴3である(第21図 図版10-1)。調査区東側を南北に伸びる溝は、茶園に伴って掘られた溝である。遺物はすべて表土から出土したもので、縄文土器・剝片・近世陶器がある。出土量はきわめて少ない。

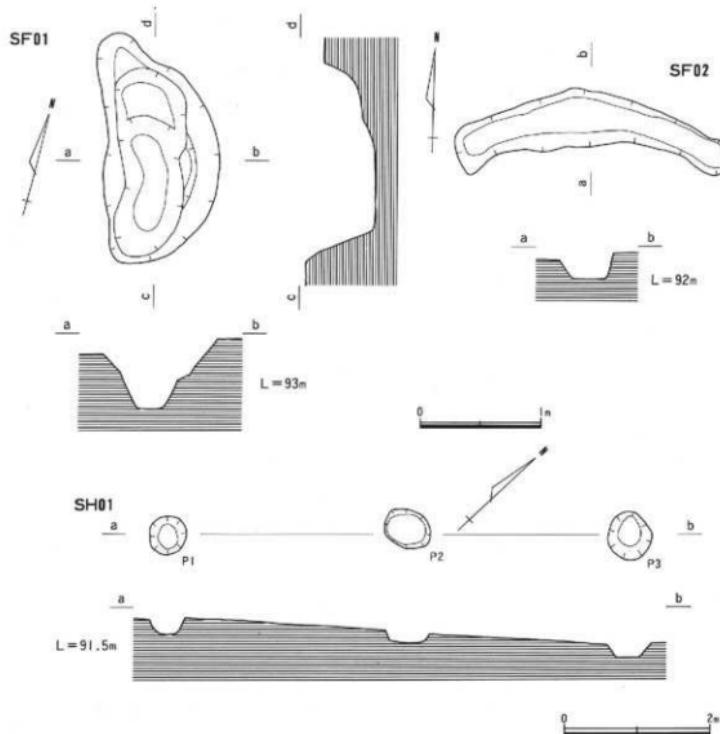
第2節 遺構と遺物

検出遺構

S F01 (第22図 図版10-3)

土坑S F01は、チ8グリッド北側から検出された。平面形態はやや不整形な橢円形を呈し、規模は長径1.85m・短径95cm・深さ55cmを測る。底部北側に段を作り、壁のたち上がりは比較的急で、途中に弱い稜を持つ。覆土は黒色土で、やや褐色味を帯びる。壁際には褐色土が多く混入していた。

遺物は全く出土していない。土坑の時期については不明と言わざるを得ないが、覆土が向畑遺跡に見られた黒色土に類似していることや表土中から縄文土器や剝片が出土していることから縄文時代の遺構である可能性を持つ。



第22図 S F01・S F02・S H01実測図

S F02 (第22図 図版10-4)

土坑 S F02は、ト7グリッド北側から検出された。平面形態は細長の溝状を呈し、東西に弧状に伸びる。規模は長さ2.3m・幅45cm・深さ25cm程を測る。覆土は炭化物混じりの褐色土で、粘性を持つ。

遺物は全く出土しておらず、形状からも積極的に遺構と断定できるものではない。但し、覆土は向畠遺跡のS P101に類似しており、中・近世頃に人の手が加えられた可能性はある。

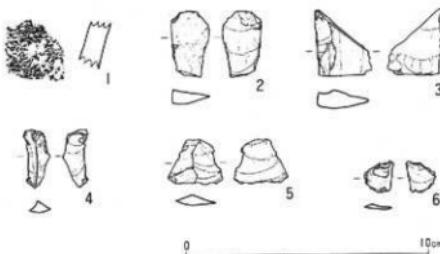
S H01 (第22図 図版10-2)

リ7グリッドからリ8グリッドにかけて3個の小穴が検出された。ほぼ一直線に均等に配列していたことから、調査区域のため全容は不明であるが、掘立柱建物跡の可能性があると考えてSH01とした。柱穴の間隔は、P1~P2間が約3m・P2~P3間が約2.8mを測る。主軸方位はN-43°-Eである。柱穴はほぼ円形を呈し、径30~40cm・深さ10~15cmを測る。覆土は暗褐色土で、ほとんど縮まっていない。

柱穴から遺物は全く出土していない。遺構の時期については不明と言わざるを得ないが、覆土の状況からそれほど古いとは考え難い。表土中及び丘陵下の斜面から近世陶器や山茶碗が出土していることから、中・近世に属する可能性を持っている。

出土遺物 (第23図)

表土中から出土した縄文土器と剝片を第23図に掲載した。1は無文ではあるが、胎土等から縄文土器と考えられる。深鉢の副部破片で、器厚は7mmと厚く茶褐色を呈する。2~6は剝片で、調整加工は認められない。石材は2と6がチャートで、2は暗緑色、6は黒色を呈する。3と5が珪質凝灰岩、4が黒耀石である。



第23図 出土遺物実測図 (9)

第V章 まとめ

第1節 向畠遺跡出土土器について

今回の調査で出土した土器については、第3章すでに述べてきたが、ここでは縄文土器と弥生土器の特徴と編年的位置付けについて整理することにする。

縄文土器

縄文土器は全て破片であり、文様等が明らかで図示できたものは、19点に過ぎない。各土器は文様等の特徴から大きく4群に分けられ、さらに細分できる。

1群土器 押型文土器で、2分類できる。

a類 格子目文を施す。(2・9)

b類 楕円文を施し、内面に太い沈線を有する。(11・12)

2群土器 比較的薄手で、胎土も緻密である。いずれも口縁部付近と考えられ、内鷺している。特徴から4分類が可能である。

a類 地文に粗い縄文を施し、隆帯に刻みを加える。(16)

b類 横位の細い隆帯を貼付する。(13)

c類 口縁部付近に半截竹管による平行文・弧状文を施す。(14・15)

d類 口縁部付近に平行あるいは弧状の沈線を施す。(1・3)

3群土器 厚手で胎土も粗く、全体に茶褐色を呈する。地文から3分類できる。

a類 地文に縄文を施し、隆起線・貼付隆帯を施す。(4・5・7・8)

b類 地文に半截竹管による平行沈線を施す。(10)

c類 地文にヘラ状工具による列点文を施す。(17)

4群土器 やや厚い土器で、暗褐色を呈し、胎土に白い砂粒を多く含んでいる。胸部にヘラ状工具による羽状沈線を施す。(18・19)

1群土器は早期押型文土器である。b類は口縁部内面の沈線から、西日本を中心に分布する高山寺式に比定される。高山寺式は楕円文を主体とする土器で、格子目文を含んでいないことから、a類はb類より古く位置付けられる。高山寺式に先行する土器型式には、神宮寺式・瀬沢式等があげられるが、a類は小破片2点のみであり、型式対比はできない。2群土器c・d類は、近畿・瀬戸内系の中期後葉の里木II・III式に比定される。地文が不明のため両者の分類はできないが、太目の沈線を施すd類はより後出と考えられる。a類は小破片であるため断定はできないが、文様は船元式にも類似し、やや古く位置付けられる可能性がある。b類もはっきりしないが、細い隆帯は里木式にも認められ、胎土も類似することから里木式に属すると考えられる。3群土器は、中部系の中期後葉の曾利II式に比定される。瀬戸内系の里木式と中部系の曾利式の伴出は丘陵下の牛岡遺跡に於いても確認されており、当遺跡と密接な関係にあったと推測される。4群土器は関東系の後期中葉の加曾利B II式に類似するが、羽状沈線文は比較的時間幅を持っていることから断定はできない。

弥生土器

竪穴住居跡から比較的まとまった資料が出土している。器種は壺と甌の2器種で、高壺・鉢等の器種は出土していない。

壺

法量的には大・中・小の3つに区分され、出土量は中が多くを占める。形態的特徴からいくつかの器

形分類が可能である。全体を復元できるものが少ないので、口縁部と胴部に分けることとする。

口縁部形態

器形からA～Cに分かれ、さらに細分できる。

壺A 単純口縁を呈し、やや内側して開くもの。

a類 口唇部を面取りし、内面に文様を施すもの。(28・38)

b類 口唇部の面取りがなく、内外面に文様を持たない。(37)

壺B 折り返し口縁を呈するもののほとんどが外面に縦位の沈線を持つ。

a類 口縁部断面形が方形のもの。(23)

b類 口縁部断面形が三角形のもの。(21・29・52)

壺C 複合口縁を呈するもの。

a類 中型で比較的面が狭く、下部を垂下させるもの。(30・40) 外面に沈線を施すものと内外面に繩文を施すものがある。

b類 大型で幅広の面を作り、外面に間隔の広い沈線を施す。(31・41) 口縁部内面の屈曲がa類に比べ強い。

胴部形態

形態から3つに分けられる。胴部文様は肩部に集中し、文様はS字状結節縄文と櫛刺突羽状文のいずれかである。

a類 肩部が張らずに、無花果状を呈する。(37)

b類 下半が張り出して、比較的強く屈曲する。(20・26等) 大型のものが多い。

c類 下半の張りが弱まり、球形に近いもの。(42・56)

甕

すべて台付甕と考えられる。法量的には大小2つに分かれれる。壺同様に全体を復元できるものが少ないので、各部位毎に分けることとする。

口縁部形態

形態から2つに分けられる。ほとんどが口唇に刻みを持ち、持たないものは1点(59)のみである。

a類 口縁部が緩やかに外反するもの。(46・47等)

b類 口縁部がくの字状に屈曲するもの。(34・36等)

胴部形態

a類 最大径が上半にあるもの。(47・60)

b類 最大径が中央付近にあり、球形に近いもの。(46・57等)

脚部形態

形態から3つに分けられる。内面調整は、ナデを施すものが多いが、ハケメも見られる。

a類 直線的に開くもの。(45・46等)

b類 内彎気味に開くもの。(22・51)

c類 端部を折り返すもの。(68)

以上の土器はその特徴から、東遠江地方の後期菊川式に属するものである。菊川式土器の編年研究は、中島都夫氏や鈴木敏則氏らを中心に進められ、およそ古・中・新の3期に区分されてきている。これらの土器は、形態や文様等両氏の指摘する新様相を呈することから、後期後葉に位置付けられるものと思われる。また、壺肩部のいわゆる有段羽状が見られないこと、高环が出土していないこと等、より菊川流域の様相に近似している。但し、高环の器種構成比率は、同じ菊川流域でも三沢西原遺跡と耳川遺跡では差があり、遺跡の内容によって異なるのかもしれない。

各器種・器形は、上記のように多少の形態差あるいは施文の違いが認められるが、その多くは菊川式土器の持つ多様性の内にあるものである。従来の研究成果から形態変化として捉えられるものは、壺胴部と甕口縁部形態がある。壺胴部形態はa類→b類→c類、甕口縁部形態はa類→b類という変化を捉えることができる。しかし、これらの変化は漸次的であり、各遺構において共伴してしまっている。実際に各窪穴住居跡は時期差を持っているわけであるが、土器から住居跡の新旧を捉えることは困難であると思われる。また残念ながら、この逆の好資料も得ることはできなかった。

第2節 向畠遺跡弥生時代の集落について

今回の調査では窪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。各住居跡は形態等に幾つかの共通性と相違が見られる。ここではこれらを整理すると共に集落の変遷について触ることにする。

平面形態

楕円形（S B105・107・108・109・111・112）と胴張りの隅丸方形（S B101・102・103）の2つに分けられる。しかし、きわめて視覚的なもので厳密な分類ではない。付表1に示したように、全体としてはどちらか一方が長くなる。

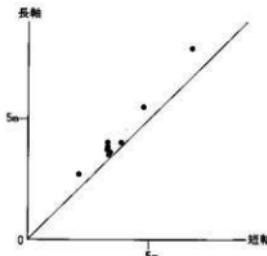
当地域の窪穴住居跡の時期的変遷は、従来報告されているように、長楕円形（中期後半～後期前半）→楕円形（後期後半）→方形（古墳時代前半）と考えられている（形態の表記は各報告によって異なる）。また弥生時代後期後半から古墳時代前半にかけては、楕円形→寸の詰まった楕円形（胴張りの隅丸方形を含む）→隅丸方形→方形という漸次的な変化を捉えられそうである。当遺跡の各住居跡は後期後葉に属するものあり、平面形態はこれまでの事例に合致している。方向としては楕円形から胴張の隅丸方形への変化が考えられる。

規模

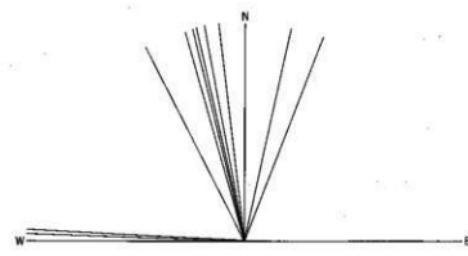
付図1に示したように、およそ4段階に分かれ。中心は長軸4m程度で、7軒を占める。小型のSB112は、調査状況からも仮設的な住居であったと思われる。SB109は長軸8m近くあり、他に比べ突出している。全体としては、周辺の調査例から見るとやや小型である。

炉跡の位置と方位

炉跡は4本主柱穴の中心から一方へ片寄る。不明瞭なものもあるが、この方向を主軸方位として捉えて、付図2に示した。方位はほぼ3群に分かれ。N-10°-W前後にSB103・105・107・111の4軒と掘立柱建物跡SH101が集中し、一つの規則性が認められる（西へずれるという点では、SB109もこの群に含まれる）。この規則性は、同時性を示していると見ることもできる。これに対してその外は、不規則としてまとめることもできる。なお、炉跡の位置は周辺の調査例を見ると、後期前半までは主柱穴の中心にあり、後半からこのように一方へずれるという傾向が認められるようになる。



付図1 住居跡の規模



付図2 住居跡の主軸方位

壁溝

壁溝を有する住居跡は、SB108・109・111の3軒である。いずれも調査区西側に隣接し、1つの群として捉えることができる。これらを一般的な住居と見れば、この共通性は同一指向を持った集団を反映したものと言えよう。また、これらは掘り方構造も共通しており、大型住居SB109を含むことから、集落の中で住居以外の機能を持った竪穴として捉えることもできる。但し、他の住居跡と比べても、出土遺物等に違いは認められない。

掘り方構造

各住居跡は貼り床面下の掘り方に違いが認められ、形状から3つに分類できる。

a類 中央部を高く残して、その周囲をドーナツ状に掘り下げるもの。(SB105・108・109・111)

b類 壁際を浅く残して、中央部を深く掘り下げるもの。(SB107)

c類 全体を平坦に掘り下げるもの。(SB101・103・104)

SB102とSB112は貼り床が施されていないが、形状としてはc類と考えるべきであろう。b類はSB107の1軒のみで、他遺跡にも類例を見ない。

当地域では、掘り方構造について整理されたものはほとんどない。これについては、富士宮市の月の輪遺跡群の調査報告(富士宮市1981)に詳しい。月の輪遺跡群では、ここで言うa類からc類への時期的变化を指摘している。今後検討を要するが、当地域においても同様の变化が見られる可能性は高い。また、SB107のように特異な例もあることから、壁溝同様に機能あるいは集団についても考慮して行く必要もある。

集落の変遷

以上の相違と重複関係から、短絡的ではあるが、各住居跡は概ね2期に区分できる。

1期	2期
SB110(?) - SB109(焼失)	- SB108 - (建て替え)
SB111	- SB104 - (建て替え?)
SB105	- SB103(焼失) - SB112 - SB102
SB107	- SB101 - (拡張)
SH101	- (?)

基本的には竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟が1組になって、集落を構成していたと考えられる。このまままりは、経営と消費とともに「単位集団」(近藤1984)として捉えられそうである。

全体図(第3図)に見るよう、各住居跡は掘立柱建物跡を中心にして弧状に配置している。2期になると、各住居跡は一回り外へ広がるようである。丘陵は東へ続くが、これを見る限り、集落は完結しているように思える。

第3節 まとめ

向畠遺跡と社宮寺遺跡の調査については各章で述べてきた通りであるが、各遺跡の調査成果を整理してまとめにしたいと思う。

向畠遺跡

今回の調査で、当遺跡は縄文時代早期・中期、弥生時代後期の集落跡であることが明らかとなった。縄文時代早期の土器は、押型文土器が出土している。量的には少ないが、西日本を中心に分布する高山寺式と呼ばれるものとそれ以前に遡る土器である。土器の一部は、焼土坑とした炉跡に伴っていた。縄文時代中期の遺構としては、円形の竪穴住居跡1軒が検出された。中期の住居跡が、円形を呈することはすでに知られており、当遺跡も例外ではないことが確認できた。調査区内には、住居の炉跡同様の焼

土坑がいくつか認められ、集落の規模はもう少し大きかったと思われる。出土した土器は、中期後葉に属するもので、中部山地系の土器と瀬戸内系の土器とが混在している。隣接する牛岡遺跡からも同様な土器が出土しており、両遺跡が密接な関係にあったと推測される。掛川市内では、早期の遺構の検出は初めてであり、堅穴住居跡は3例目である。検出した遺構・遺物は少ないが、この地域の縄文時代の動向を知る上で、貴重な資料となろう。

弥生時代後期の遺構は、堅穴住居跡11軒・掘立柱建物跡1棟が検出された。ほぼ住居4軒と倉庫1棟を1単位として、2~3期にわたって営まれていたと考えられる。このように小規模な集落は、いくつか集まって群として形成されることが多く、周囲に同様な遺跡が存在する可能性は高い。出土した土器は、この地域で菊川式と呼ばれているものである。全て菊川式の中でも後期後葉に位置付けられ、かなり短期間にこの集落は廃絶したようである。この地域の弥生時代後期の集落は、古墳時代前期まで継続するものが多いが、この集落は他に先行しており興味深い。

社宮寺遺跡

遺構・遺物こそ希少であるが、隣接する向畠遺跡や牛岡遺跡の生活領域としての一端を窺わせるものである。遺跡の立地する丘陵は、崖崩れ等によって相当流失してしまった部分が多い。特に向畠遺跡のように遺構が多く残る東斜面が流失してしまったことが、遺構等が少ない原因とも考えられる。

今回の調査結果は、この地域の縄文時代と弥生時代を考える上で、貴重な資料になると思われる。両遺跡は、從来知られていないかった遺跡である。今後逆川上流域において、このような遺跡が発見されることが多くなると考えられ、十分な注意が必要となろう。

調査ならびに本書の作成に当たっては、多くの方々の御指導・御助言・御協力をいただいた。末尾ながら、この場をかりて深くお礼申し上げたい。

参考文献

- | | |
|------------------|------------------------------------|
| 掛川市教育委員会 (1984) | 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』 |
| 掛川市教育委員会 (1984) | 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅱ』 |
| 掛川市教育委員会 (1984) | 『中原遺跡発掘調査報告書』 |
| 菊川町教育委員会 (1985) | 『菊川町埋蔵文化財報告書第4集三沢西原遺跡』 |
| 袋井市教育委員会 (1984) | 『長者平遺跡』 |
| 岡谷市教育委員会 (1987) | 『橘沢押型文遺跡調査研究報告書』 |
| 茅野市教育委員会 (1990) | 『樹柵』 |
| 倉敷考古館 (1971) | 『倉敷考古館研究集報第7号里木貝塚』 |
| 掛川市教育委員会 (1989) | 『女高遺跡発掘調査報告書』 |
| 掛川市教育委員会 (1988) | 『高田遺跡発掘調査概報』 |
| 掛川市教育委員会 (1987) | 『瀬戸山I-a遺跡発掘調査概報』 |
| 浅羽町教育委員会 (1987) | 『北原遺跡』 |
| 袋井市教育委員会 (1991) | 『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』 |
| 袋井市教育委員会 (1992) | 『鶴松遺跡V』 |
| 富士宮市教育委員会 (1981) | 『富士宮市文化財調査報告書第2集月の輪遺跡群II』 |
| 近藤義郎 (1959) | 「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1 |
| 中島道夫 (1988) | 「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号 |
| 松井一明 (1988) | 「静岡県における匣郭集落と高地性集落について」『マージナル』No.8 |

図 版

(写 真)

図版 I 遺跡周辺環境（空中写真）

（この位置に図版 I の空中写真が記載されるべきですが、本文中の図版記載文と矛盾する記述が含まれています。）

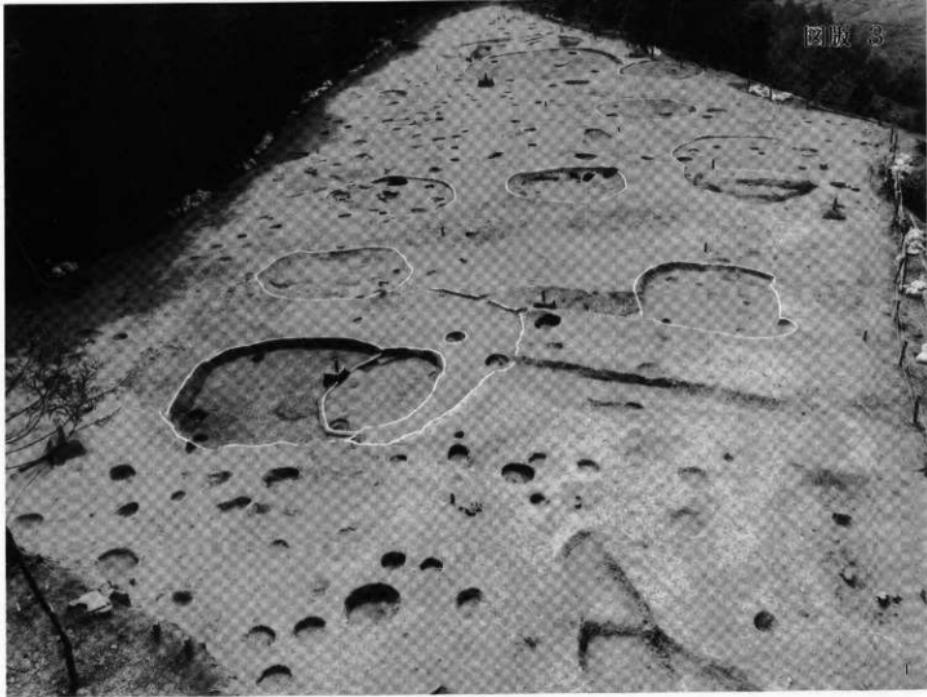


図版2 向烟遺跡遺構全景（空中写真）

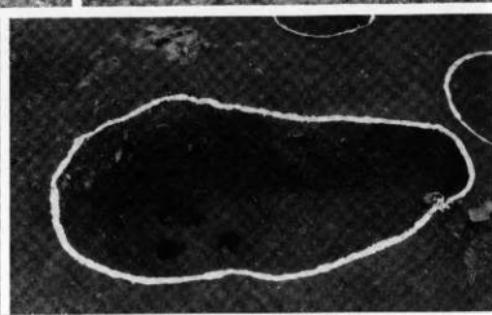
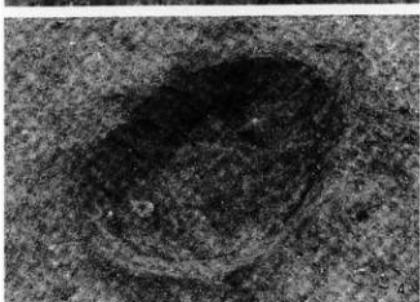
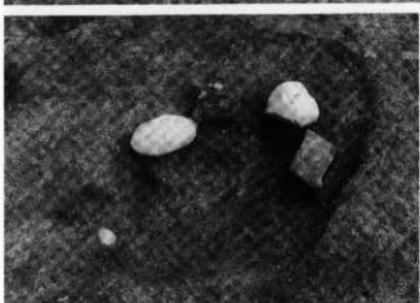




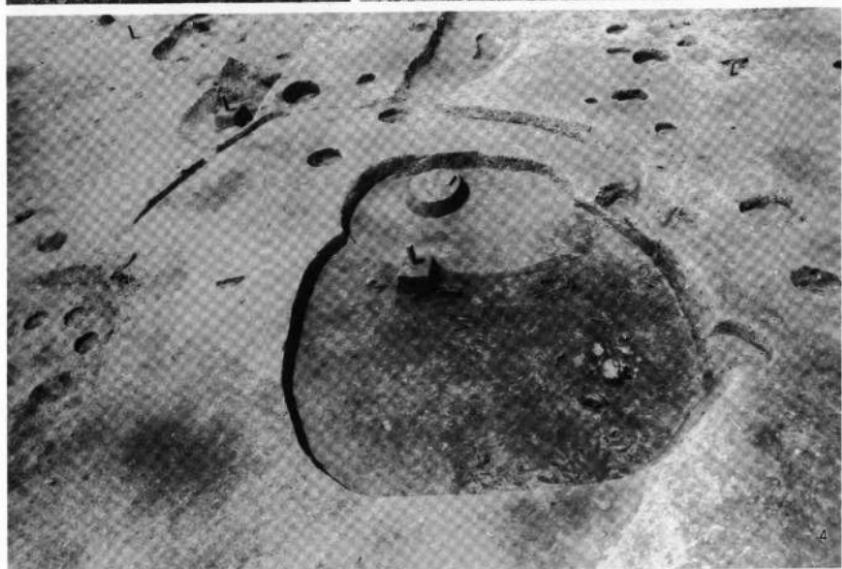
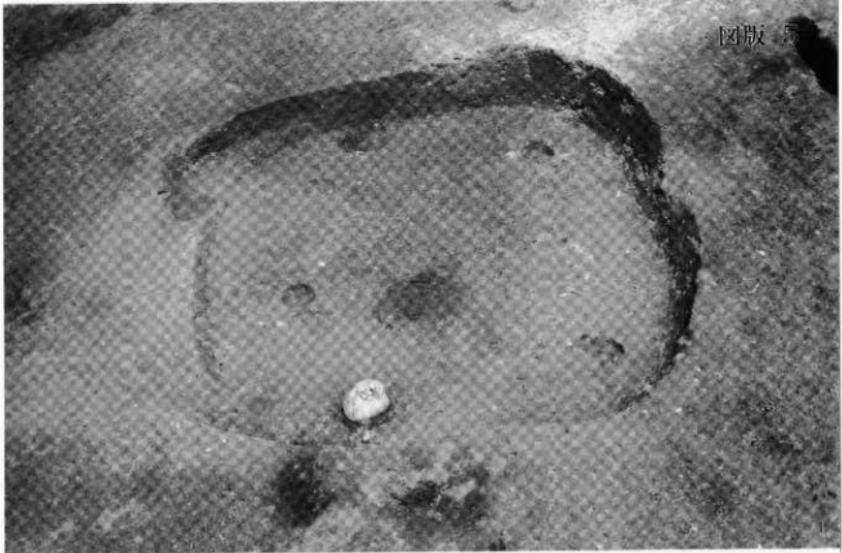
図版3 1. 向畠遺跡遺構全景（東から）
2. 向畠遺跡遺構全景（西から）



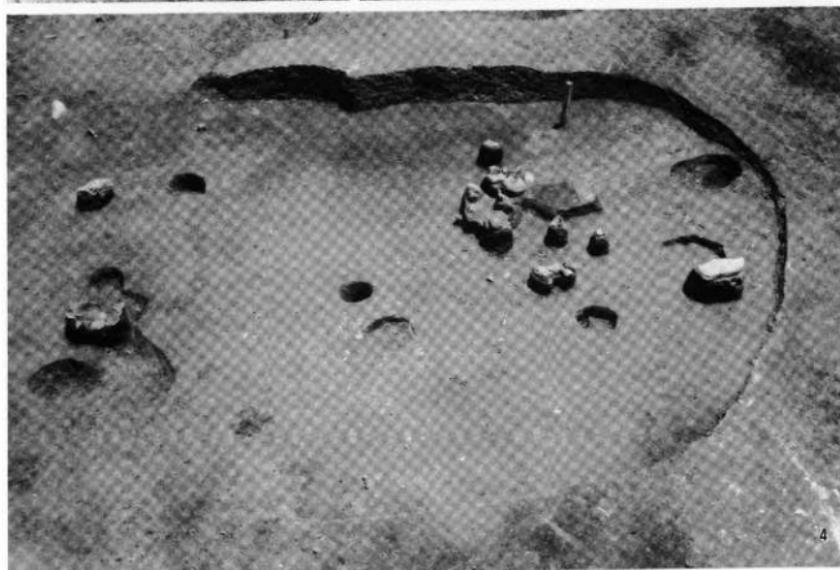
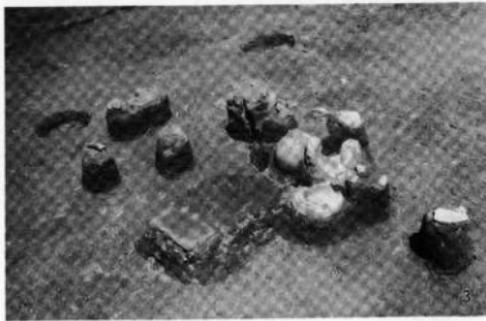
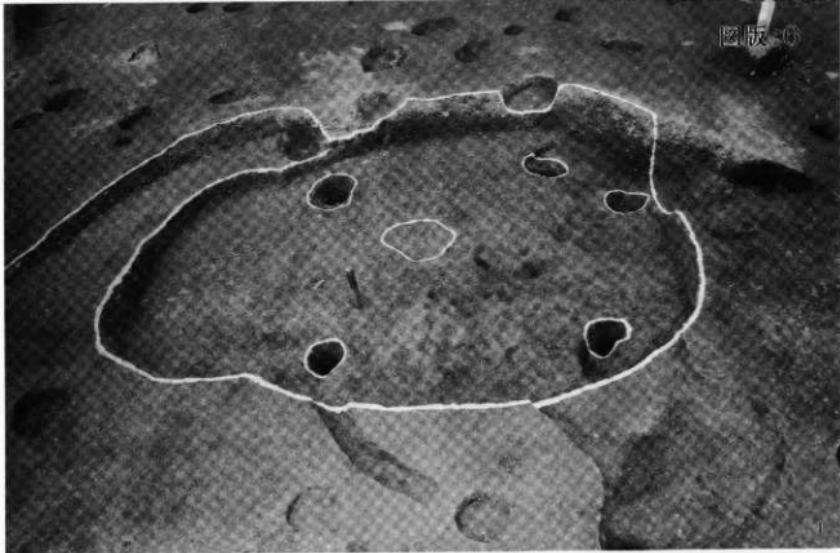
- 図版4 1. SB106(西から)
2. SB106炉跡
3. SPI15
4. SPI20
5. SPI23
6. SPI40礫出土状況
7. SPI40完擾状況



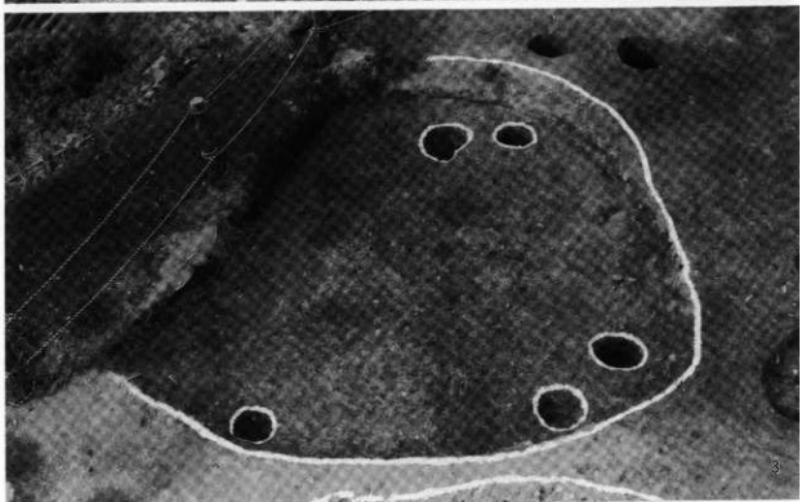
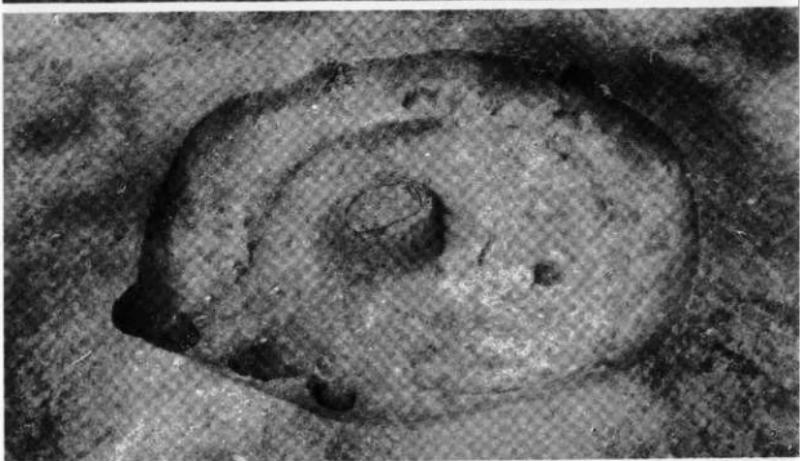
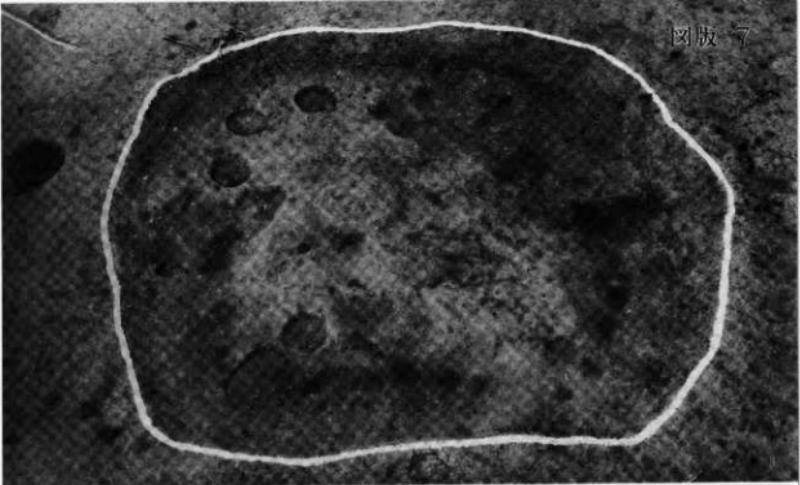
- 図版5 1. SB101 (西から)
2. SB101土器出土状況
3. SB102炉跡
4. SB102・SB103・SB112 (南から)



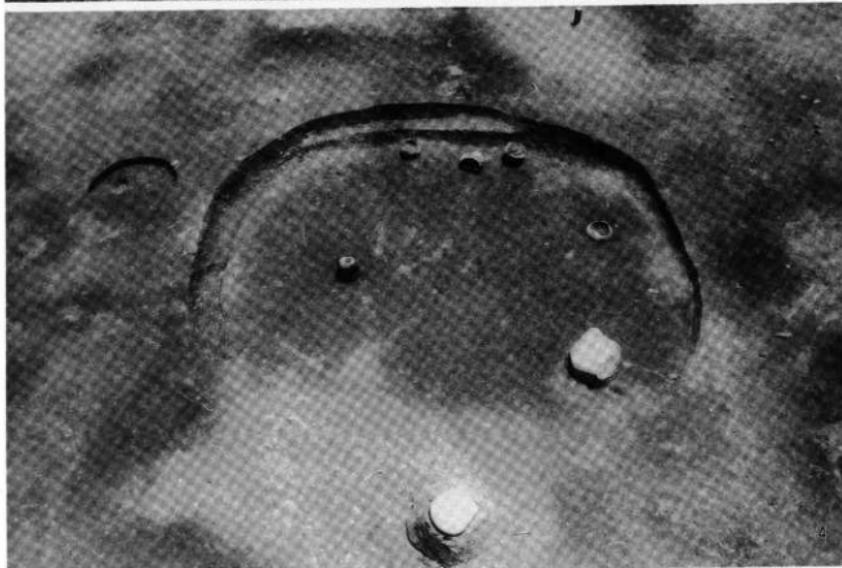
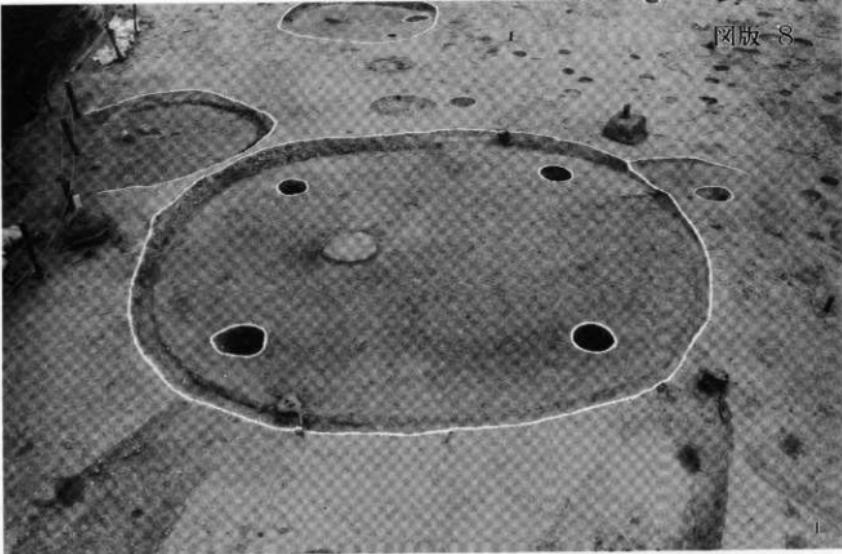
- 図版 6 1. SB103 (西から)
2. SB103土器出土状況
3. SB104土器出土状況
4. SB104 (西から)



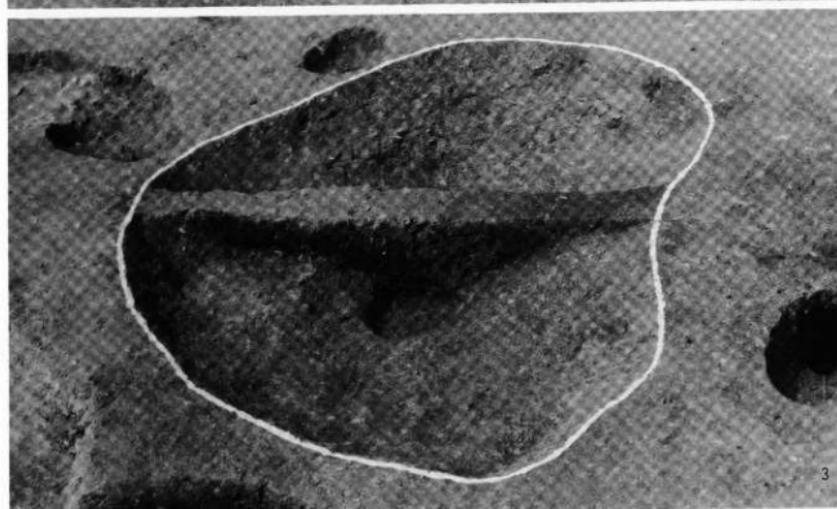
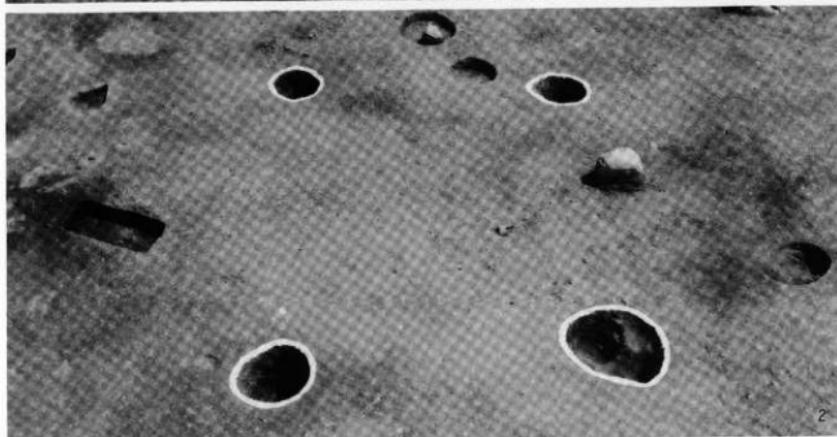
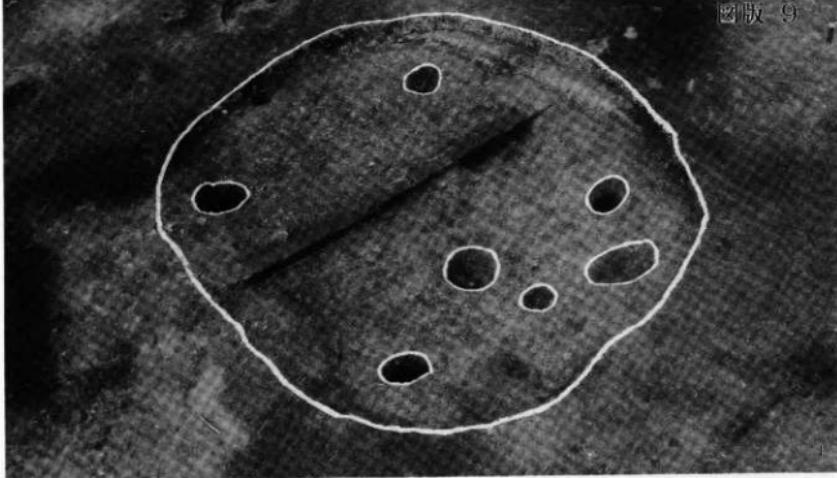
- 図版7 1. SB105 (西から)
2. SB107 (西から)
3. SB108 (西から)



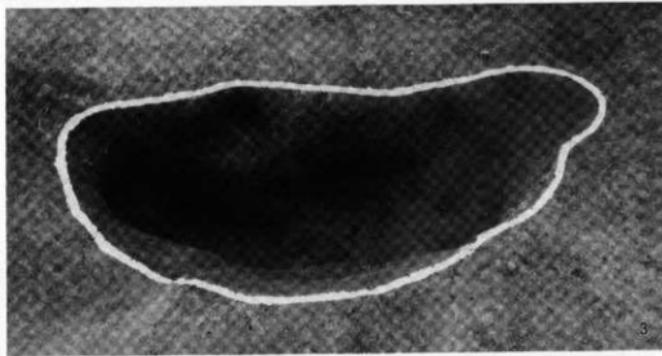
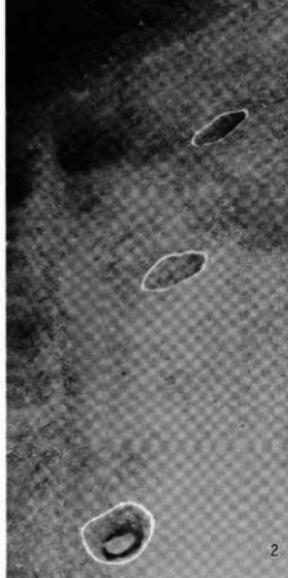
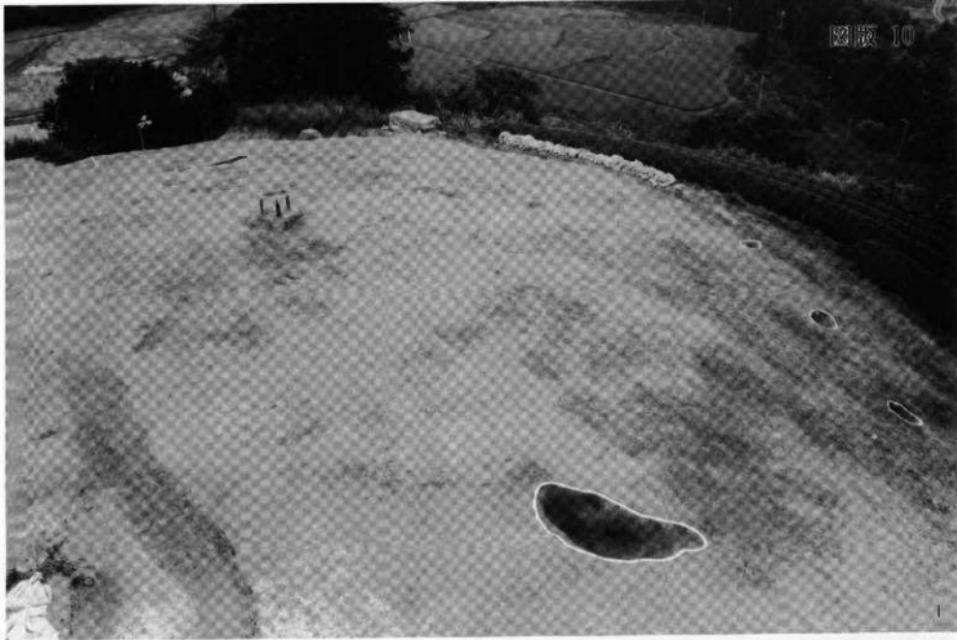
- 図版 8 1. SB109・SB110 (西から)
2. SB110土器出土状況
3. SB111土器出土状況
4. SB111床面検出状況 (西から)



- 図版9 1. SB111掘り方検出状況（南西から）
2. SH101（西から）
3. SX106（風倒木跡）



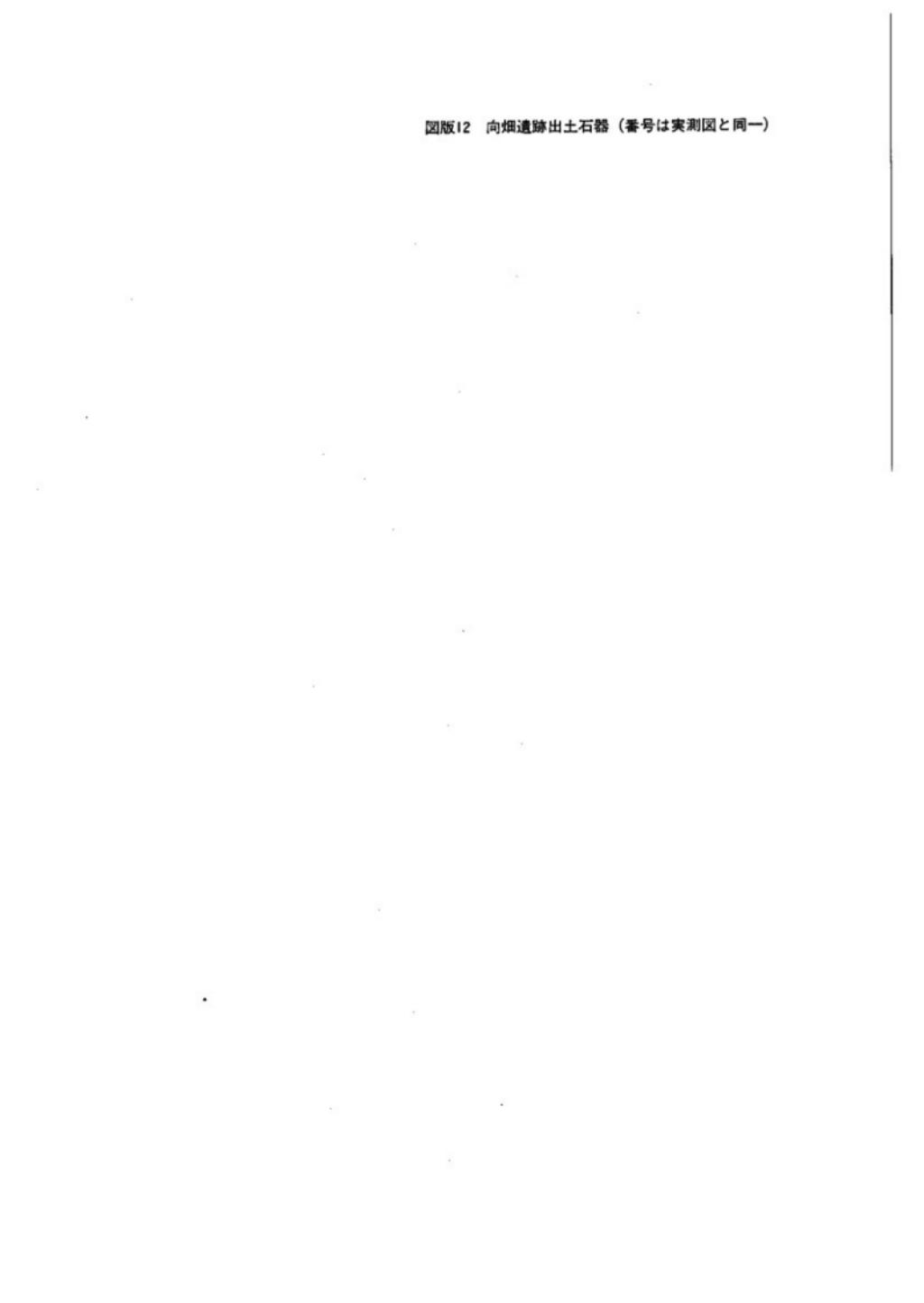
- 図版10 1. 社宮寺遺跡遺構全景（東から）
2. SH01（南から）
3. SF01（東から）
4. SF02（東から）



図版II 向畠遺跡出土縄文土器（番号は実測図と同一）

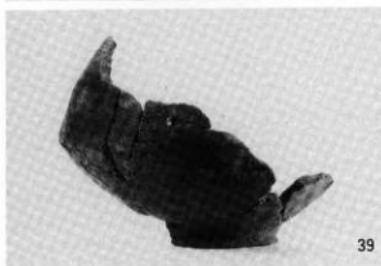
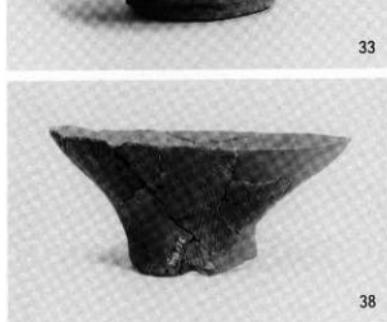
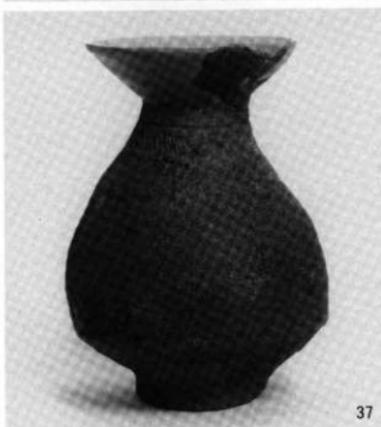
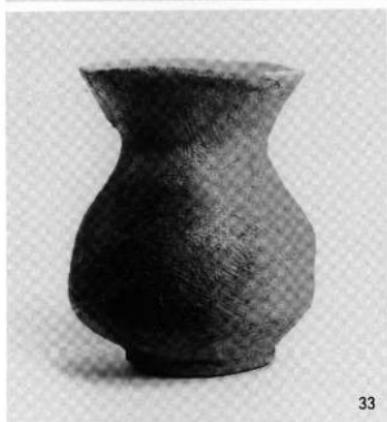
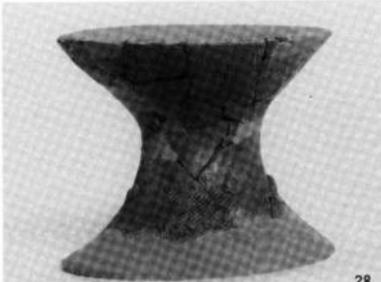


図版12 向畠遺跡出土石器（番号は実測図と同一）

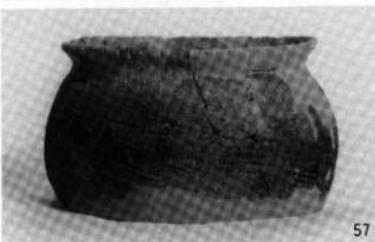
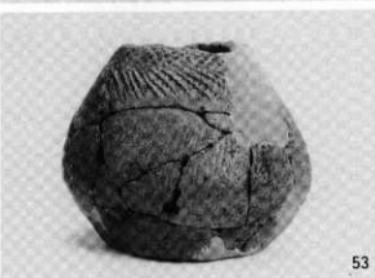
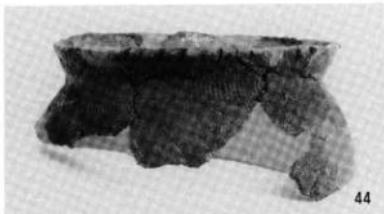




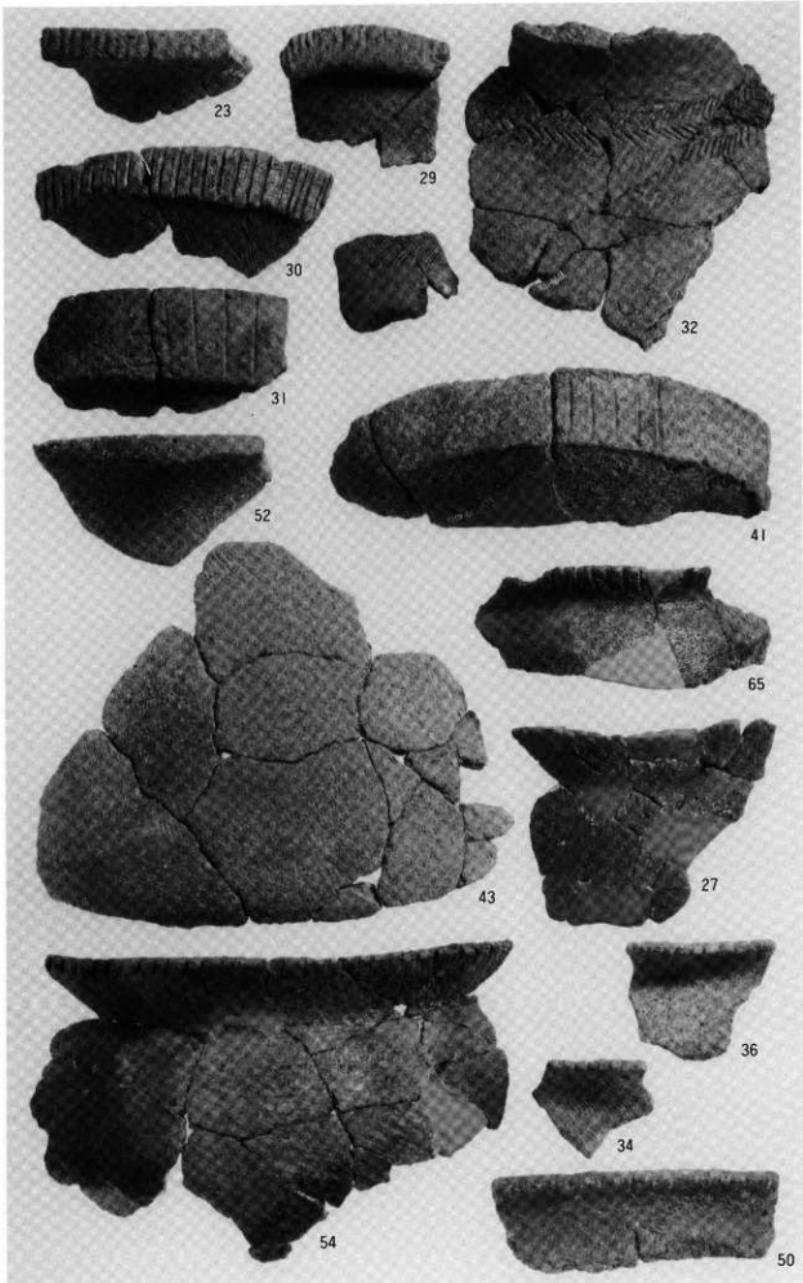
図版13 向畠遺跡出土弥生土器（番号は実測図と同一）
20 SB101、28・33 SB103、37～42 SB104



図版14 向烟遺跡出土弥生土器（番号は実測図と同一）
44-47 SB104、53 SB109、56-59 SB111



図版15 向畠遺跡出土弥生土器（番号は実測図と同一）
23・27 SB102、29～36 SB103、41・43 SB104
50 SB108、52・54 SB109、65 包含層



静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第35集

向畠遺跡・社宮寺遺跡

平成3年度日坂バイパス埋蔵文化財
発掘調査報告書

平成4年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印 刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
T E L (054) 282-4031